

## アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源 (6) ブラック・ナショナリズムの成熟と成功：ヒラリー・テイグ

原 百年

### はじめに

本稿は、「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源 (5) ブラック・ナショナリズムの先駆者：デヴィッド・ウォーカー」(原 2023) の続編で、ウォーカーの1世代後にブラック・ナショナリズムを成熟させ、「成功」させたヒラリー・テイグ (Hilary Teague, 1802-1853) を扱うものである。ヴァージニア州リッチモンド出身で元奴隷のテイグは、「リベリア独立宣言」を執筆したことで有名なブラック・ナショナリストである。17歳のときにリベリアに移住し、貿易業で経済的に成功すると同時に、リベリアで最も広く読まれた新聞 *Liberia Herald* の編集長を務めた。また、アメリカ植民協会が指揮するリベリア植民地政府で、1835年以降、諮問委員や商務大臣を務め、政治家として活躍した。1847年には、自ら「リベリア独立宣言」を執筆し、リベリア憲法の草案作成にも関わるなど、リベリア共和国の独立に深く関わった。独立と同時に上院議員および初代国務大臣に就任し、法務大臣として1853年に没するまで、リベリア共和国政府の重鎮として活躍した。「リベリア独立宣言」や彼のスピーチの内容をみれば、リチャード・アレンやデヴィッド・ウォーカーと比べて、テイグがより明確な表現をつかって「ブラック・ナショナリズム」を展開していたの

がよく分かる。アメリカ黒人が「ブラック・ネーション」のネーション・ステートを建設することに成功した唯一の事例として、その主要メンバーのひとりだったテイグの生涯は特筆されるべきである。

以下では、テイグが生きた時代の社会的背景を概観したうえで、テイグがいかにしてブラック・ナショナリストになり、ブラック・ナショナリズムを成功させたか詳しく見ていくこととする。

## 第1節 社会的背景

19世紀はじめ、イギリスの産業革命が綿の需要を大幅に増大させたことにともない、南部では「コットン・キングダム」と呼ばれる一大経済圏が生まれた。その結果、黒人の奴隷人口は急激に増加した (Quarles 1994: 74)。1790年に70万人だった奴隷人口は、1830年になると200万人を超した。特に多かったのは、やはりヴァージニア、ノースカロライナ、サウスカロライナの南部の大西洋沿岸諸州だったが、1830年頃にはジョージア、テネシー、アラバマ、ミシシッピなどの低南部にも約60万人の奴隷がいた。その後も奴隷人口は増え続け、1860年ころには約400万人を数えた (Franklin 1878: 138)。コットン・キングダムがどれだけ盛況だったか、この数字だけをみてもよく分かつろう。

南部の白人は、1860年ころに約800万人いたので、比率は黒人奴隷が1とすると白人が2ということになる。もちろん、全ての白人が奴隷を所有していたわけではない。奴隷を所有していた白人は約40万人だけだったというので、あとの760万人の白人は、奴隷を所有していなかったということになる。40万人の白人が400万人の奴隷を所有していたということは、平均すれば1人の白人所有者が10人の奴隷を所有していたという計算になる (*ibid.*: 139)。40万人の奴隷所有者が奴隷制度維持を強く希望するのは

分かるが、奴隷をもたない760万人の南部の白人たちは、奴隷制度をどのように考えたのか。フランクリンによれば、南部の白人たちは、総じて奴隷制度の維持を希望したのであった。奴隷を所有しない白人たちは、いつか自分たちも奴隷所有者になり、一旗掲げることを夢見ていた。また、彼らは、何の仕事をするにしても奴隷制プランテーションの体制に経済的に依存していた。ゆえに、「奴隷制は全南部の政治的・経済的考え方を支配し、その社会的形態を支配するようになった」(ibid.: 139)。北部諸州が奴隷制廃止を要求し始めれば、南部諸州が一斉に反発するのは火を見るより明らかなことであった。

40万人の白人が400万人の奴隷黒人を所有し、酷使するというプランテーション体制を維持するために、南部の白人たちは一群の「奴隷取締法」(Slave Code)を確立していった。奴隷取締法は、主に二つの規範的側面から奴隷制度を保護した。ひとつは、奴隷は人間ではなく「財産」であるから、そのような財産の所有権は保護されなければならないという規範であった(Quarles 1994: 79)。あとひとつは、奴隷たちの反乱を防ぎ、奴隷所有者の白人たちを身の危険から守らなければならないという規範であった。結果的に、奴隷黒人は「家畜」や「家財」と同じような扱いを受ける一方、所有者の白人に逆らう者は容赦なく罰せられた。奴隷は家畜と同じなので、大体の場合において家族という単位を無視して売買されたし、所有者に逆らうようなことがあれば容赦ない鞭打ちが待っていた。奴隷は自衛のためであっても白人を殴ることは許されなかったし、法廷に訴えることができなかった(ibid.: 85)。所有者以外の者が女奴隷を強姦することは犯罪として見なされたが、それは他人の財産を侵害したからにすぎず、所有者が自分の女奴隷を強姦することは自由であった(Franklin 1878: 140)<sup>1)</sup>。奴隷取締法は、奴隷の生活のあらゆる面に影響を及ぼし、プランテーション体制を維持する一方、他方で黒人奴隷たちにこの上ない苦しみ

を与え続けたのである。奴隷取締法の存在は、読み書きができ、何らかの権利意識が芽生えた奴隷黒人たちにとっては耐え難きものであったに違いない<sup>2)</sup>。

そのほとんどがプランテーションで働いた南部の奴隷は、所有者の気質や経済状況にもよるが、総じて衣食住の生活環境も劣悪で、病気や空腹に苦しんでいた。それに加えて先ほど述べたような奴隷取締法によって苦しめられていたから、所有者のもとから逃亡する奴隷は続出した。奴隷を連れ戻すための「逃亡奴隷法」は1790年には成立していたが、捕まらずに北部やカナダへ逃れる奴隷も多かった。パトロールや防止手段を講じても効果が上がらず、所有者たちの頭を悩ませていた (Quarles 1994: 93)。

白人の奴隷所有者たちが最も恐れたのは、奴隷たちの反乱であった。1800年の「ガブリエルの乱」と1822年の「ヴィシーの乱」のような有名な反乱だけでなく、その後もさまざまな奴隷たちの反乱が南部で起きた。中でも有名なのは、1831年に起きた「ナット・ターナーの乱」である。ナット・ターナーは生まれつき「靈感」が強く、しばしば「神のメッセージ」を聞いたという。そして自らを予言者だと信じるようになった。やがて、「奴隷黒人を解放せよ」という神からのメッセージを聞き、自らを救済者モーゼであると考えに至った。そして、70名ほどの奴隷黒人を率いて、反乱を起こしたのである。ヴァージニア州サザンプトンの奴隷、ナット・

---

1) 女奴隷は常に強姦の脅威にさらされていた。1860年ごろの奴隷人口は約400万人だということは既に述べたが、その内ムラトリーの奴隷が40万人いたというから、どれだけの女奴隷が白人男性の子を産んだかがわからう (Franklin 1978: 155)。

2) 南部では奴隷に読み書きを教えることは一般的に禁止されていたが、所有者が個人的に自分の奴隷に読み書きを教えるケースがあった。また、自由黒人を対象にした黒人学校が南部のほとんどの都市に存在し、そこで奴隷黒人も一緒に学んでいたことが知られている。奴隷の50人に1人が読み書きできたとする歴史家もいるくらいなので、「奴隷黒人はまったく読み書きができなかった」と考えるのは間違いである (Franklin 1978: 153)。

ターナー率いる奴隷黒人の集団が、60名ほどの白人男女を殺害したその事件は、全米を震撼させた (White 1996: 71)。ウォーカーの *Appeal* のような扇動的文書が南部の字が読める奴隷の間で広まったことも、南部の白人の恐怖心をおおった。ナット・ターナーの乱で奴隷取締法が強化されたにも関わらず、その後もジョージア州、アラバマ州、ルイジアナ州、ミシシッピ州で何度も暴動があった。1853年には2500人の奴隷黒人が関係した大規模反乱未遂事件がニューオーリンズで起き、1856年にもノースカロライナ州で大規模な反乱が起きた。南北戦争中も奴隷たちは反乱を起し、奴隷制度が廃止される1865年までそれは続いた (Franklin 1978:159-162)。この潮流は、奴隷黒人たちが奴隷制度とそれに関わる抑圧的な法律に対して強烈に反発していたという証拠であり、彼らがいかに不満を抱きながら生きていたかを物語る証拠であった。

1830年には約32万人の自由黒人がいて、1860年には約49万人になっていた。奴隷黒人が同じ時期に2倍に増えていたので、それより少し低い比率で増加したということになる。この時期に北部諸州は既に奴隷制度を廃止していたことから自由黒人 (誰にも所有されていない黒人) は北部に集中して住んでいたと思われがちだが、実際は北部と南部に同じくらいの数の自由黒人がいた (Quarles 1994: 102)。このことは、この時期に南部でもかなりの数の奴隷黒人が自由の身分を得ていったということを示している。北部でも南部でも、自由黒人は主に都市に住んだ。なぜなら、都市には経済的・社会的機会がより多くあったからである。

北部では、独立革命時代に「自由と平等」という思想的観点から黒人の地位は引き上げられたが、その後悪化の一途をたどった。北部の黒人は、革命後に自由になった上、多くの州で投票権を与えられた。しかし、ほとんどの州で自由黒人の投票を禁止するようになり、ペンシルヴェニアでさえ1838年には投票権を「白人男子のみ」に限定する法律を成立させた

(Franklin 1978: 167)。また、自由黒人は白人たちと同じように税金を払っているにも関わらず、その税金で運営された公立学校へ行くことは許されていなかった。さらに、裁判所においては、自由黒人は白人を相手に訴えを起こすことが許されていなかった。さらに、「逃亡奴隷法」の強化によって、いつ奴隷として南部へ売りとばされてもおかしくないような環境の中で暮らすことを強いられるようになった。

政治的・社会的地位が低下する一方、他方で経済的に中産階級に属するような自由黒人が多数現れるようになった。都市に暮らす自由黒人は、様々な熟練職人、製造業、商業、専門職の職に就き、高額不動産を所有する自由黒人も増えた (Quarles 1994: 110)。南部にも成功した自由黒人は沢山いたが、このような傾向は特に北部の諸都市で見られたため、南部の自由黒人や逃亡奴隷たちは北部を目指し、北部都市の自由黒人の数が増えていった。それに比例して、特に職人階級の白人による黒人排斥運動が起き、1930年代以降、白人による「人種暴動」がニューヨークやフィラデルフィアなどの比較的リベラルな都市でも頻発した (Franklin 1978: 179-181)。リンチ事件も多数起きるようになり、自由黒人が白人による虐待と暴力行為の対象にされたのは、この時代のひとつの潮流であった。

自由黒人たちは、南部でも北部でも、白人たちによる差別や虐待から身を守るためだけでなく、黒人たちの社会的・文化的・経済的進歩のために、様々な互助組織や友愛団体を都市部で組織した (Quarles 1994: 111)。この傾向は以前から存在していたが、1930年代以降に特に顕著になった (Franklin 1978: 173; Quarles 1994: 124)。北部都市部では黒人学校も多数組織され、自由黒人の教育機会は拡大した。南部全州は自由黒人の教育を法的に禁止していたが、実際はさまざまな方法で教育を受けていたことが知られている。1850年ごろ、ボストンでは2038人の自由黒人のうち約1500人が学校教育を受けていたし、中部のバルティモアでは1400人、南部

のニューオーリンズでも1000人の自由黒人が学校へ行っていた。1860年には、全国で32600人ほどの自由黒人が学校へ通っていたという (Franklin 1978: 176)。さらに、大学へ進学する自由黒人も現れ、「黒人大学」としてリンカーン大学 (ペンシルヴェニア州バルティモア) が1854年に、ウィルバーフォース大学 (オハイオ州ウィルバーフォース) が1856年に法人化された。1800年前後のリチャード・アレンやデヴィッド・ウォーカーの時代から比べると、1930年代以降ははるかに規模が大きく、多種多様な「黒人組織」が都市部で形成されていった。

南北戦争以前に、自由黒人たちが自分たちの考えを述べ、意見を交わすための著作や新聞は、北部で飛躍的に増えた (黒人たちによる南部での言論活動や集会は極めて制限されていた)。特に1840年以降に多かったのは、フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass) の *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave* (1845) のような自らの奴隷時代の経験を語った自伝であった<sup>3)</sup>。これは、北部における当時のアボリショニズム運動の流れの中で現れたものである。また、ウィリアム・ネル (William Nell) の *Services of Colored Americans in the Wars of 1776 and 1812* (1851) や *The Colored Patriots of the American Revolution* (1855) のような優れた歴史書を著す黒人も多数現れた<sup>4)</sup>。また、マーティン・デイレイニ (Martin Delaney) の *The Condition, Elevation, Emigration, and Destiny of the Colored People of the United States* (1852) は、デヴィッド・ウォーカーの *Appeal* (1829) と同じように、黒人たちの悲惨な状況と将来的な展望を語った書として有名である。「黒人新聞」に関しては、

3) 他にも、ヘンリー・ビブ (Henry Bibb) の *Narrative of the Life and Adventures of Henry Bibb, an American Slave* (1849)、映画にもなったソロモン・ノーサップ (Solomon Northup) の *Twelve Years a Slave* (1853) など多数がある。

4) 他に、ジェームス・ペニンントン (James Pennington) が著した「初めての黒人史」、*The Origin and History of the Colored People* (1841) が有名である。

1827年の *Freedom's Journal* が最初で、*Rights of All* (1829)、*Mystery* (1843)、*North Star* (1847) , *The Voice of the Fugitive* (1851) など、時代を追って多数現れるようになった。さらに、1830年以降、いわゆる「黒人大会」(African Conventions) が頻繁に開催されるようになり、各地の黒人リーダーたちが集まって、彼らの問題を話し合うようになった。特に南北戦争前の10年間には、ニューヨーク、フィラデルフィア、ローチェスター、クリーブランドなどの都市で頻繁に黒人大会が開かれるようになった (Franklin 1978: 182)。このように北部の自由黒人が出版活動と言論活動を活発化させたことは、この時代に彼らの教育レベルが全体的に押し上げられ、北部の白人社会が自由黒人たちの出版・言論活動を許容したからということもあるが、これまで白人たちに独占されていたメディアや言説に対抗し、彼らが内省的に物事を考え、彼らの視点から物事を公に論じはじめたということの意味した。

北部では、1830年ころから白人の急進的アボリショニストたちの活動が目立つようになっていった。アボリショニスト新聞 *Liberator* を発行していたウィリアム・ガリソンが有名だが、主に宗教家、博愛主義者、教師らからなる様々な白人アボリショニスト協会が出現した。白人アボリショニストたちによる新聞は、1820年代からあった *The Emancipator*, *Genius of Universal Emancipation* に加え、*Human Rights*, *National Anti-Slavery Standard*, *The Philanthropist* など、南北戦争終結まで次々と発刊された (Franklin 1978: 191)<sup>5)</sup>。もちろん北部にもアボリショニズムに反発する白人たちは沢山いたが、全体的にみれば奴隷制に反対であった。出版後の

---

5) 白人アボリショニストで有名なのは、ガリソンの他に、聖職者でジャーナリストのイライジャ・ラヴジョイ (Elijah Lovejoy)、法学者で雄弁家のウェンデル・フィリップス (Wendell Phillips)、敬虔な信仰にもとづくアボリショニズムを展開していたセオドア・ウェルド (Theodore Weld) などがある (Quarles 1994: 128)。



1年間に30万部売れたというハリエット・ストー (Harriet Stowe) の *Uncle Tom's Cabin* (1852) も、北部のアボリショニズムに勢いを与えた。その小説は、奴隷制度の残忍性と黒人奴隷の優れた人間性を描写し、相当な数の白人読者たちをアボリショニストに転じさせたからである。南北戦争が近づくにつれ、北部の白人たちは総じて奴隷制度反対の立場を明確にしていた。もちろん、フレデリック・ダグラスとガリソンのコンビが象徴するように、黒人と白人が協力しあってアボリショニズムを盛り上げていったという側面もあった。武力による即時奴隷解放を訴え、1859年10月に白人アボリショニストのジョン・ブラウン (John Brown) が50名の武装集団 (白人と黒人) を率い、ハーパーズ・フェリーにある政府の武器庫を襲撃した事件は、北部のアボリショニストたちが漸進主義にしびれを切らし、急進化していた証拠であった。

北部でのアボリショニズムが急進化し、勢力を増すと、当然南部奴隷州は警戒した。特に南部の奴隷所有者が不満を持ったのは、「地下鉄道」 (underground railroad) の活発化であった。「地下鉄道」は、エージェントになった白人や黒人が逃亡奴隷を家にかくまい、南部の奴隷たちを北部やカナダへ逃がすために作った組織であった。20マイルから30マイルに一軒の間隔にエージェントの家があり、それがいわゆる「駅」であった。逃亡奴隷たちは、そこで食べ物や物資の支援を受け、北へと逃れていった (Quarles 1994: 95)<sup>6</sup>)。1810年から1850年までに約10万人というおびただしい数の逃亡奴隷がこの「地下鉄道」を使って北部へ逃れたというから (Franklin 1978: 203)、南部の奴隷所有者たちは何としてもそれを食い止めようと必死になった。南部政治家の圧力で、強化された「逃亡奴隷法」

---

6) 逃亡奴隷たちは、方向に迷ったとき、北極星を目印に北部を目指した。フレデリック・ダグラスの新聞 *The North Star* は、逃亡奴隷たちのガイドとなった北極星にちなんで名づけられたものである。

を連邦議会で1850年に成立させたのは、そのためであった。

南部の政治家は、その4年後には「カンザス・ネブラスカ法」を連邦議会で成立させた。「カンザス・ネブラスカ法」は、カンザス準州とネブラスカ準州を奴隷州にすることを禁止した「ミズーリ妥協」(Missouri Compromise, 1820年)を覆し、両準州が奴隷州になるか否かはその(白人)住民が決めることを定めた。さらに、元奴隷のドレッド・スコット(Dred Scott)の身分をめぐる争われた「ドレッド・スコット裁判」で、南部の政治家の圧力下にあるロジャー・ブルック・トーニー(Roger Brook Taney)連邦最高裁判所長官が、「黒人は合衆国市民ではない」と判断した(Quarles 1994: 133-134)。これらの法律や判決は、北部のアボリショニストたちからすれば、「南部からの反撃」として映った。

このままでは奴隷制度の維持が不可能だと考えた南部の奴隷所有者たちは、これまで述べたような法律や奴隷取締法を強化するかたわら、連邦からの脱退を主張し始めた。1860年12月にはサウスカロライナ州が早くも連邦からの脱退を宣言した。翌1861年2月までに南部諸州も連邦からの脱退を宣言し、アメリカ連合国を結成した上で、ジェファソン・デイヴィスが暫定大統領に指名された。南軍が連邦のサムター要塞を砲撃して、南北戦争が始まったのは、その2か月後のことであった。

南北戦争へと向かう1830年代から1860年代という時代の社会的背景を要約すると、次のように言えよう。南部では奴隷黒人たちが過酷な生活に苦しみ、大小の反乱を頻繁に起こしていた。北部では自由黒人たちの市民的地位は没落の一途をたどる一方、他方でアボリショニストの「黒人組織」や「黒人新聞」を通じて「黒人の権利」に関する言論活動を活発化させいく状況が生まれた。北部の白人アボリショニストの活動は、黒人のそれよりむしろ過激化していったくらいである。そして南部の白人は奴隷制度に執着し、是が非でも奴隷黒人を「財産」として定義し、その所有権を守り

抜くために法律や制度を強化していった。大枠として、この状況、すなわちアポリシヨニズムと黒人の権利意識が高まる一方、他方でそのような期待をことごとく打ち砕くような法律や制度が次々と現れる状況があった。本稿で扱うヒラリー・テイグ (Hilary Teage) は、このように南北が奴隷制度をめぐる対立する激動の時代に「権利意識のギャップ」を拡大させ、分離主義に傾倒し、ブラック・ナショナリズムを展開していった。テイグのブラック・ナショナリズムはアフリカへのエミグレーションという形をとり、テイグはリベリア共和国を独立させることに成功した。以下では、テイグが如何にしてブラック・ナショナリストになり、分離独立を成功させたかを詳しくみていくことにする。

## 第2節 ブラック・ナショナリストになるまで

### 1. 生い立ち<sup>7)</sup>

ヒラリー・テイグは、1805年にヴァージニア州のリッチモンドで奴隷の

---

7) ブラック・ナショナリズム研究において、ヒラリー・テイグの存在はほとんど取り上げられてこなかった。テイグのブラック・ナショナリズムを主題にした論文は、リベリア人の C・バローズの論文 “‘In Common with Colored Men, I Have Certain Sentiments’: Black Nationalism and Hilary Teage of the *Liberia Herald*” (C. P. Burrowes: 1999) があるが、他の文献はテイグを部分的に扱ったものしかない。また、テイグの自伝または伝記は一冊も出版されていない。ブラック・ナショナリズム研究は主に1960年以降アメリカで盛んになったが、アメリカの研究者たちはアメリカ国内のブラック・ナショナリズムに注目するだけで、リベリアにあまり注目してこなかった結果だといえる。テイグの人生が比較的詳細に紹介されている記事としては、テイグが死んだ1853年、追悼の意を込めて *African Repository* に掲載された ‘The Late Hilary Teage of Liberia’ がある。*African Repository* は、アメリカ植民協会が黒人のアフリカ植民活動に関する記事を掲載するために発行した季刊誌 (1822年3月創刊) であった。したがって、アメリカ植民協会の意向に沿った記事が多く、アメリカ政府や白人を批判するよ

子として生まれた。父と母はともに奴隷で、3歳年下に妹がいた。腕の良い馬具職人である父コリン (Collin) は、少年時代から自由への憧れが強く、いつの日か自由の身分を買い取ると心に決めていたという<sup>8)</sup>。そのような強い思いを胸に、父コリンは長年かけて1300ドルを貯めた。そして父コリンはその有り金すべてを叩いて、一家の自由を買い取った (Taylor 1837: 17)。このように、テイグは奴隷の子として生まれたが、少年時代に自由の身分になったということになる。「自由になる」という強い思いを抱き、その志を貫いた父コリンから大きな影響を受けたということは容易に想像できる。

自由の身分を得た後、父コリンはバプティスト教会の牧師になって一家を支えた。母も敬虔なバプティストだったというので、テイグと3歳年下の妹も強くバプティスト教会からの影響を受けたものと思われる。父コリンは学校教育を受けていなかったが、簡単な読み書き程度ならできたとされている (Taylor 1837: 17-18)。恐らくは、バプティスト教会で白人たちから読み書きを教わったのであろう。

テイグは父コリンよりも高度な教育を受けた。「彼らは (テイグと妹) は、気が優しく、よく言うことを聞く子どもたちで、かなりの程度学校教育を受けていた」というので、少年時代からテイグは読み書きを習い、学問に触れていたことが分かる (*ibid.*: 19)。テイグ兄妹に教育を提供したのは、ウィリアム・クレイン (William Crane) らニュージャージー出身の白人バプティストたちであった。白人バプティストは、黒人向けの夜間学校を開き、そこで成人や子どもを含めた黒人たちに教育を行った。白人

---

うな内容はあまり見当たらない。1847年にリベリアが独立した後も季刊誌は発行され続け、1892年まで続いた。'The Late Hilary Teage of Liberia' は、1853年10月 (同年5月にテイグは死亡) に発行されたものである。

8) 'The Late Hilary Teage of Liberia,' *African Repository* 27, 1853, pp. 316.

向けの公立学校さえまだなかったリッチモンドで、クレインら白人バプティストたちは、ラテン語、ギリシャ語、数学、歴史、地理、哲学などのリベラル・アーツを黒人たちに教えた (Burrowes 1999: 21)。このようにして、テイグはヨーロッパの伝統的学問に触れる機会を得ていたのである。テイグは、アメリカで過ごした少年期に、読み書きはもちろん、幅広いリベラル・アーツの学識を得ていた。もちろん、「自由と平等」というヨーロッパの伝統的概念も間違いなくテイグの意識の中に埋め込まれたであろう。

17歳の時に一家で西アフリカに移住し、シエラ・リオーネ (フリータウンの近くのフォーラ・ベイという村) で一時を過ごしているが、そこでイギリス式の教育を受けたとされている。「あっという間に多くのことを学び、古代と近代の幾つかの難しい言語をすぐにマスターしてしまった」というし、「典型的な学者」と思わせるような話しぶりだったというから (Armistead 1848: 8)、学問や知識に対する意欲は相当高かったことが分かる。白人バプティストの黒人学校やシエラ・リオーネのイギリス式教育を通じて、テイグが少年期に多くの知識を蓄えると同時に、白人たちの価値観や思想に触れていたことは間違いない。

テイグの生い立ちを考えると、父コリンの生き方は極めて重要である。父コリンは、先ほど述べたとおり、リッチモンドのバプティスト教会に所属していた。コリンは、アフリカの同胞にキリスト教を布教し、彼らを「文明化」する傍ら、彼らが「救い」を得られるよう切望したという。コリンがリッチモンドで活発に布教活動に関わった1810年代は、まさにポール・カフィが北部と中部の諸都市で「アフリカ帰還運動」を呼びかけた時代でもあった。それに共鳴するかたちで、1815年、リッチモンドのバプティスト教会は「リッチモンド・アフリカン・バプティスト布教協会」(the Richmond African Baptist Missionary Society) を設立した。その布教協

会の中心になったのが、コリンと黒人バプティストのロット・ケアリー (Lott Cary) であった (Miller 1975: 68)。1815年といえば、アメリカ植民協会の設立される1年前のことである。アメリカ初の黒人教会であるフィラデルフィアのAME教会で、リチャード・アレンら黒人キリスト教徒たちがアフリカへのエミグレーションを議論し始めたのは、アメリカ植民協会が設立された直後のことであった。そのことを考えれば、アフリカで布教をしようというコリンやケアリーの活動はかなり先駆的だったということが分かる。リッチモンドのバプティスト教会は信徒に黒人が多かったものの「黒人教会」ではなかったため、その布教協会の設立には白人たちも関わった。黒人学校を開設し、テイグの恩師でもあったウィリアム・クレインもその一人であった。布教協会の当初からの目的は、その協会名からもわかるように、アフリカでバプティストの布教活動を行うことであったが、少なくとも2年間は信徒の間で支持を得ることができなかった。ところが、連邦政府から支援を受けたアメリカ植民協会が本格的に動き出すと、それに後押しされるかたちで支持を集め、アフリカ布教のための募金も集まった。そのような流れの中で、コリンはケアリーとともに黒人同志を集め、1821年1月にアフリカへと向かったのであった (*ibid.*: 68)。コリンは一家でアフリカへ移住する決心をし、当時17歳だったテイグは必然的にそれについていくことになった。父コリンはリッチモンドの有名な黒人活動家だったし、リベリアに最初に移住した「黒人ピルグリム・ファーズ」のリーダー格でもあった。テイグにとって、尊敬の対象だったに違いない。また、リベリアに移住してから、テイグがバプティスト教会で父コリンの助手として働いていたことを考えると、父はテイグのメンター的存在だったともいえよう。自力で一家の自由の身分を買い取り、敬虔なバプティストとして生き、リベリアへのエミグレーションを断行した父コリンの価値観は、間違いなくテイグの生き方や思考に影響を与えたと思わ

れる。

## 2. 初期リベリア・エミグレーション運動とテイグ

### (1) アメリカ植民協会とエリザベス号

テイグ一家が身を投じたりベリア・エミグレーション運動は、アメリカ政府の支援を受けたアメリカ植民協会が中心となって進めたものである。アメリカ植民協会は、アメリカの黒人をアフリカへ帰還させることを目的にして1816年に白人によって設立された組織で、リベリアの誕生に大きな役割を果たしたことで知られている。アメリカ植民協会は、その起源において、純粋に黒人の自由と幸福を願い、人道的観点から黒人のアフリカ帰還を支援する目的を有していた。ある一定の割合のメンバーはそのような目的をもち続けたが、その後、特に南部の政治家たちが、奴隷制度を維持する上で自由黒人を「厄介者」と見なし、彼らをアメリカから排除する目的で、アメリカ植民協会の運営に関わるようになった。したがって、アメリカ植民協会には常に二重の目的意識が見え隠れし、黒人たちはそれに翻弄された。リチャード・アレンが「アフリカ帰還運動」を推進する傍ら、アメリカ植民協会を信用していなかったのは、そのためであった<sup>9)</sup>。

1819年、アメリカ植民協会はアメリカ連邦議会から10万ドルの予算を得て、黒人のエミグレーション運動を開始した。そしてその翌年の1820年、アメリカ植民協会はエリザベス号をチャーターし、全米から集められた88名の自由黒人と数名の白人エージェントをシエラ・リオーネのフリータウンへ上陸させた<sup>10)</sup>。イギリス政府の管理下にあったフリータウンは、当時

---

9) アメリカ植民協会については「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源 (4) —ブラック・ナショナリズムの先駆者：リチャード・アレン—」(原2022)で詳しく紹介したので、そちらをご覧ください。

10) リチャード・アレン、ジェームス・フォーテン、アブソラム・ジョーンズが「アフリカ移住運動」を推奨した結果、1820年、フィラデルフィアから22名の自由黒人がアフ

すでに街として賑わいをみせていて、西アフリカの玄関口として機能していた。エリザベス号に乗ってきた一行はその後、フリータウンの少し南のシェルブロ島 (Sherbro Island) に一時的に居住したが、黄熱病やマラリアなどの病気によってその半数が死亡し、結局またフリータウンに戻って、アメリカ植民協会の支援を待つことになった (Jaynes 2005: 42)。要するに、最初のエミグレーションは、失敗に終わったのである。

## (2) ノーチラス号の黒人——アメリカ植民協会との確執

翌年の1821年1月、33名の自由黒人がノーチラス号に乗ってフリータウンに上陸した。今回はヴァージニア州の「リッチモンド・アフリカン・バプティスト布教協会」が積極的に関わり、黒人バプティストが多く参加していた。テイグの一家がアフリカに移住したのは、このときのことであった。アメリカ植民協会は、前回同様白人エージェントを同行させたが、今回は武装したアメリカ海軍兵士も同行させた (McGraw 2007: 130)。

彼らは一時的にフリータウン近くのフォーラ・ベイ (Fourah Bay) に生活の拠点を置いた。ここでテイグがどのような経験をして、どのようなことを考えたか、それを伝える詳しい資料はない。しかし、テイグの意識に強い影響を与えたに違いない状況は分かっている。最も大きな影響を与えたのは、黒人と白人たちの確執であろう。総勢50名にも満たない小さな

---

リカへ移住した (Nash 1988: 240-241)。フィラデルフィアの自由黒人が搭乗したのは、このエリザベス号であった。更に興味深いことに、エリザベス号に乗って西アフリカに渡ってきた黒人たちのリーダーは、リチャード・アレンとも深い交流があったダニエル・コーカー (Daniel Coker) であった。コーカーは、アレンと共にアフリカン・メソヂスト・エピスコパル教会 (AME) を設立した創設者のひとりで、AME 教会の司教を務めた人物である。AME 教会全体としてアメリカ植民協会への不信感が強い中、アレンはアフリカ・エミグレーション運動を断念したが、コーカーは反対を押し切って自ら参加した (Miller 1975: 57-59)。



コミュニティで、黒人側と白人側が対立関係にあったのだから、影響を受けないはずはなかった。また、テイグの父コリンが黒人側のリーダーのひとりだったので、なおさらである。西アフリカへ向かうノーチラス号の船上で対立はなかった。しかし、同行したアメリカ植民協会のエージェント、アメリカ政府が派遣した海軍兵士、そして黒人たちの間の関係性が非常に曖昧だったため、フォーラ・ベイで生活が始まるや否や、問題は生じた。黒人側のリーダーであるコリンとケアリーは、黒人たちがアメリカ植民協会やアメリカ政府にどのような義務を負うのか不明であることに不満を抱くと同時に、エージェントや海軍兵士が様々な命令を黒人たちにしていることに反発した (Miller 1975: 69)。

実は、前年にエリザベス号でフリータウンに到着した先遣隊には、アメリカ植民協会が起案した規約が存在した。その規約には、次のような条項が含まれていた<sup>11)</sup>。

第1条 アメリカ植民協会によって保有される領土内で生まれた者は全て自由で、アメリカ合衆国における自由人と同じ全ての権利と特権が与えられる。

この第1条で、植民地内で「生まれた者は全て自由」であると定められ、移住してきた黒人たちがアメリカで自由だったか奴隷だったかを問わず、彼らの子孫が「生まれながらにして自由」であることが謳われた。また、第5条で「この植民地において、奴隷制度は禁止する」と定められていることから、アメリカで奴隷だった者でもアフリカ植民地に来れば自由の身

---

11) この規約は「1820年規約」(1820 Constitution)と呼ばれていて、リベリアの歴史を扱うインターネットのホームページで見ることができる。'1820 Constitution,' retrieved from the home page 'OnLiberia.org,' internet (2015年12月17日にアクセス)。

分を得られた。これらの条件は当然と言えば当然で、もしこの最低限の条件が明確にされなかったら、アメリカの黒人たちがアメリカ植民協会の斡旋でアフリカに移住することはまずなかったに違いない。

第1条で黒人たちの自由を保障した上で、第2章でそれを制限するような条項を設けている。

第2条 アメリカ植民協会は、随時、植民地政府にとって適切とされるような規則を設ける。ただしそれは、アメリカ植民協会がエージェントを引き揚げ、植民者（黒人たち）に彼ら自身の政府を委ねるまでとする。

このように、「アメリカ植民協会がエージェントを引き揚げ、植民者（黒人たち）に彼ら自身の政府を委ねるまで」、植民地運営の決定権はアメリカ植民協会にあることが定められた。更に、司法的役割はアメリカ植民協会のエージェントのみが担うこと（第3条）、全ての行政官はアメリカ植民協会のエージェントが任命すること（第4条）、以降の規約の改訂はアメリカ植民協会の同意を必要とすること（第10条）などが定められた。アメリカ植民協会のエージェントからすれば、ほぼ全ての分野の権力は彼らの手中にあり、黒人たちが彼らの命令に従うのは至極当然のことであった。ただし、それは「アメリカ植民協会がエージェントを引き揚げ、植民者（黒人たち）に彼ら自身の政府を委ねるまで」と謳っていることから、いつか分からないが、将来的に黒人たちが自治政府を持つであろうことを示唆していた。この部分がどのような経緯で含まれたか、それを示す資料はない。少なくとも、エリザベス号に乗って西アフリカに上陸した黒人たちが、この部分に大きな期待を寄せたであろうということは言えよう。

1年後ノーチラス号に乗って渡航してきたコリンとケアリーは、アメリ

カ植民協会のエージェントや海軍兵士の命令には拘束されないことを宣言した。「1820年規約」に署名することを拒否し、その後も白人たちが自分たちのためだけに物資を貯めこんでいることを非難するなどして、ことあるごとに対立姿勢をあらわにした。そしてその年の12月、コリンとケアリーは、前年にエリザベス号でアフリカへ渡ってきた黒人たちをも含め、白人たちに対抗するために「アメリカン・アフリカン・ユニオン・ソサエティ」をフォーラ・ベイで結成し、コリンが副会長、ケアリーが会長に就任した (Miller 1975: 70-71)。この一連の黒人側の動きは、何を意味したのか。当時エミグレーション運動に参加した自由黒人の言葉から、その答えが浮かび上がってくる。

我々の自由は不完全である。そしてここ (アメリカ) にいる以上、完全になる見込みは望めない。したがって、我々は去るのだ。それがたとえ長年の餓えと貧しさに耐えなければならなかったとしても。 (*ibid.*: 57)

このような思いをもってアメリカを去った自由黒人たちにとって、移住したアフリカの土地でアメリカ植民協会や海軍兵士の命令にことごとく従うのは、本末転倒であり、到底受け入れられないことであった。ミラーの言葉を借りて言えば、「彼らの多くは、すべての領土的・政治的事柄に関し、主権を有するものと単純に期待していた」のだ (*ibid.*: 60)。アフリカへ渡った黒人たちにとって、彼らはアフリカで「主権的ピープル」になれるはずであった。白人たちから独立した権力を持ち、自らを統治することができるはずであった。だからこそ、彼らはアフリカに移住する決心をしたのである。このような「主権」の意識をもった黒人たちの集団が白人たちと対峙する状況の中で、テイグも他の黒人たちと同じような意識を持つに

至ったと想像するのは難しくない。むしろ、白人エージェントたちに一致団結して対抗するために設立した「アメリカン・アフリカン・ユニオン・ソサイエティ」の副会長を父コリンが務めていることを考えれば、テイグの心に「主権」の意識がより強く根付いていったとしてもおかしくない。

結局、10月末からアメリカ植民協会と海軍兵士の総代表を務めていたエリ・アイレス博士 (Dr. Eli Ayres) が「黒人組織とは交渉しない」と断言し、相手にしなかった (*ibid.*: 71)。アイレス博士の背後には、ロバート・フィールド・ストックトン海軍中將 (Robert Field Stockton) をリーダーにした海軍兵士たちがいたからであろう。このとき黒人たちが全面対決することはなかった。自らの代表を出し、自らの声を反映させることを求めるこの黒人たちの動きは、このように封じ込められてしまった。エミグレーション運動の初期段階から、「なぜ白人たちが権力をもち、黒人たちを思いのままに統治するのか」という不満が黒人たちの間に広まっていった。

このように黒人と白人との間に確執が生まれる状況の中で、一時的な居住地であるフォーラ・ベイを出て、シエラ・リオネ以外の西アフリカのどこかにアメリカの黒人が移住できる場所を確保することが急がれた。アイレス博士とストックトン海軍中將がこのとき目を付けたのが、現在リベリアの首都になっているモンロビアの北西部に位置するメスラド岬 (Cape Mesurado) であった<sup>12)</sup>。白人エージェントと海軍兵士は、黒人たちを武装させた上で、メスラド岬を支配するゴラー (Golah) 族の王と交渉した。そして贈り物と脅しをうまく使って、土地を譲り受けることに成功した (McGraw 2007: 130)。このようにして、メスラド岬に植民地を建設する土地を確保した。

---

12) 周知の通り、後にリベリアの首都になるモンロビアは、当時アメリカ大統領だったジェームズ・モンロー (James Monroe) にちなんで名づけられたものである。モンローは、1817年から1825年まで、大統領を二期務めた。

1822年4月、テイグ一家が他の黒人たちと移住したメスラド植民地は、自然環境的に決して快適な場所ではなかった。更に人々を苦しめたのは、敵対心をむき出しにした先住民がそこに住んでいたことであった。まさに、「ピルグリム・ファーザーズ」がプリマスに上陸したときに経験した苦難が再現されたかのようであった。実際に襲撃されもしたので、いつでも戦闘準備を整えておかなければならなかった。このような状況が続く中で、病人が続出し、食糧や武器弾薬の在庫も底をつきはじめた。アイレス博士は、5月中旬にはメスラド植民地から退去する決心をした。ところが黒人たちはこれに反対し、メスラドに留まることを主張した。アイレス博士の報告によれば、黒人たちは「メスラド岬から退去してしまえば、完全に状況をコントロールできなくなってしまうかもしれないことを恐れていた」(Miller 1975: 71)。かくして、アイレス博士と海軍兵士たち白人グループがメスラド植民地から退去する中で、黒人たちはそこに留まることにした。黒人たちにとって、メスラド植民地はエクソダスにおける「約束の地」であったに違いない。ピルグリム・ファーザーズたちがプリマス植民地を守り抜いたように、メスラド植民地を守り抜く決心をしたのである。そして黒人のリーダーたちは、黒人たちに団結を呼びかけ、先住民からの脅威に怯むことなくメスラド植民地を守り抜いた (*ibid.*: 72)。当時21歳の青年に成長していたテイグは、父コリンがこのとき黒人たちのリーダーだったこともあり、中心的役割を果たしたに違いない。このとき黒人たちは、「独立した集団」であった。独立した権力を持ち、自らを統治することができる集団であった。黒人たちがエミグレーション運動に期待したのは、まさにそのような「独立し、自らを統治する集団」になることであり、状況は厳しかったであろうが満足感もあったであろう。テイグは、ここで他の黒人メンバーたちと「独立」、「自治」の経験をしたのであった。

しかし、黒人グループの「独立」と「自治」はわずか3か月のうちに終

わってしまった。アメリカ植民協会が、ジェヒューディ・アシュマン (Jehudi Ashmun) 率いる新たな白人エージェントと海軍兵士たちを、8月になって物資とともに送り込んできたからである。ここで黒人たちがアシュマンら白人グループを拒絶しなかったのは、先住民からの脅威が大きかったからであろう。11月には800人、12月には1500人ほどの先住民に攻撃されたというから、どれくらいの危機にさらされていたかわかろう (*ibid.*: 72)。黒人リーダーのひとりであるケアリーは、「アメリカに戻るなど、頭のまわりをボール (恐らく石でできた武器) が飛び交っているときでさえも、少しも考えたことはなかった」というので、メスラド植民地を守り抜くための黒人たちの士気は高かった (*ibid.*: 72)。黒人たちは、アメリカに戻って白人たちに虐げられるくらいなら、メスラド植民地で死んだ方がましだと考えていたに違いない。メスラド植民地は、彼らにとって将来を築き上げていくための「新天地」であって、そう簡単にあきらめられるものではなかった。アシュマンは、白人エージェントたちが退去していったにも関わらず体を張ってメスラド植民地を守り抜いた黒人たちに、譲歩せざるを得なかった。アシュマンは、黒人たちに役職を与え、軍事、医療、行政などの運営をある程度任せることによって、植民地内の権力バランスを保とうとした (*ibid.*: 72)。

共通の敵である先住民からメスラド植民地を守るために黒人と白人は協力したが、黒人たちは白人たちが指揮を執ることの正統性に疑問を抱き続けていた。ミラーの言葉を借りれば、「彼らの目からみれば、黒人たちは独立した植民者」だったからである (*ibid.*: 72)。そのような微妙な関係が1年ほど続いた。そのような状況の中、1823年の秋ごろ、以前メスラド植民地から退去したアイレス博士がアメリカ植民協会のトップ・エージェントとして戻ってきた。そして無謀にも、メスラド植民地の土地を独断的に再配分することを試みた。その独断的行為自体が反感を買うものであっ

たが、多くの黒人は苦勞して既に自分たちが住む小屋を建設し、設備を整えていたから、いまさら土地を再配分するというのは、とても受け入れられる政策ではなかった。しかも、反発した黒人たちに対し、方針に従わない場合は全ての食糧配給をストップすると脅したので、黒人たちは更に激怒した。結局騒乱は治まらず、アイレス博士は危険を感じて1823年12月にアメリカへ帰国してしまった。その後、黒人たちの勢いは止まらず、メスラド植民地に残ったアシュマンにも公然と反抗するようになった。アシュマンがアイレス博士と同じように食糧の配給を盾にして黒人たちに対抗すると、今度はケアリー率いる黒人グループが倉庫に押し入り、食糧と武器弾薬を奪い取った。結局これ以上メスラド植民地をコントロールすることは不可能だと悟り、アシュマン率いる白人エージェントと海軍兵士たちは逃げ去っていった (Miller 1975: 73; Mills 2014: 87)。アメリカ植民協会に対してこれだけ徹底して反抗できたのは、黒人グループの主たるパトロンがアメリカ植民協会ではなく、リッチモンド・アフリカン・バプティスト布教協会だったということもあろう (Burrowes 2004: 39)。いずれにしても、黒人たちはある種の「クーデター」を成功させたということになる。

この動乱で黒人たちが目指したことは何であったか。黒人たちが対抗しようとしたのは、白人エージェントたちの存在自体ではない。彼らの存在は、メスラド植民地の安全を保障する上で極めて重要だったからである。黒人たちが憤慨したのは、白人エージェントたちの独断的行為であり、それが彼らの「権利意識」を踏みにじったからであった。黒人たちは、「尊厳をもって扱われる権利 (自由・平等に扱われる権利)」、「自らの声を政策に反映させる権利」を自分たちがもっていると信じていただろう。さらに、「自分たちの代表を選ぶ権利」があるとも考えていたであろう。要するに、黒人たちは自分たちが「主権的存在としての権利」を有すると信じていたのであった。そうであるにも関わらず、「自分たちの代表」とは到

底言えないような白人エージェントが自分たちを専制的にコントロールしようとする行為は、黒人たちにとって「権利の侵害」以外のなにものでもなかったはずである。黒人たちは、自分たちにあるはずの「主権」を求め、その獲得を目指していたのである。黒人たちが自らを「主権の共同体」としてイメージしているという点で、彼らの思想と行動は、ナショナリズム的要素を多分に含むものであったといえよう。

アシュマン率いる白人グループがメスラド植民地から退去してから約半年が過ぎたころ（1824年の夏）、アメリカ植民協会の視察団がメスラド植民地に派遣されてきた。その代表を務めたラルフ・ガーリー（Ralph Gurley）は、「黒人たちの権利をもっと尊重しなければならない」という結論に達した。そしてガーリーは、アメリカ植民協会のエージェントによって構成される管理者評議会に権力を保持させたまま、黒人たちによって構成される諮問委員会を創設する提案をした（Miller 1975: 73）。そうすることによって、アメリカ植民協会がメスラド植民地に対して指導権を保持すると同時に、黒人たちにも請願権やある一定の自治権を与えることができた。要するに、民主政治に基づいた植民地の運営を目指したのである（July 1968: 91）。黒人たちはこれを受け入れ、和解は成立した。経済的・軍事的に自立できるという自信が黒人たちにこのときあったなら、黒人たちはガーリーの提案を拒否し、アメリカ植民協会から完全に独立する道を選んだかもしれない。しかし、アメリカ植民協会の援助なしでは、あまりにも経済的・軍事的に脆弱な状態だったのであろう。ガーリーの提案を受け入れて和解したものの、「自立できる時が来たら独立する」という思いは、間違いなくあったに違いない。

メスラド植民地で奮闘した黒人たちは、前にも述べたとおりヴァージニア州の「リッチモンド・アフリカン・バプティスト布教協会」に属する40名ほどの黒人たちが中心になっていた。そしてテイグの父コリンは、その



リーダーのひとりであった。テイグは、父コリンと行動を共にし、フォーラ・ベイとメスラド植民地での一切の出来事に関わり、多くのことを学び、思考を重ねたに違いない。リベリア・エミグレーション運動の「ファウンディング・ファーザーズ」とも言うべき彼らの思考に顕著なのは、「自由・平等の権利」と「主権的ピープルとしての権利」の主張であった。少なくともリーダー格の者たちは、アメリカを経つ前からそれらの権利に大きな価値を見出していた。だからこそ、それらの権利を得ることが不可能なアメリカを去り、それらの権利を得ることができるはずの西アフリカに移住する決心をしたのである。そして、だからそこミラーがそういうように、「彼らの多くは、すべての領土的・政治的事柄に関し、主権を有するものと単純に期待していた」のだ (Miller 1975: 60)。まだ若かったテイグがこのような黒人グループと共に西アフリカへ移住し、共に苦難を乗り越え、アメリカ植民協会の白人エージェントたちとの権力闘争に巻き込まれながら得た経験は、確実に彼の思考に大きな影響を与えたはずである。リベリア・エミグレーション運動の初期、すなわちフォーラ・ベイとメスラド植民地で格闘した1820年代前半、テイグの意識の中に「独立」、「主権」というアイデアが強烈に植え付けられたのは間違いなさそうである。

### 第3節 リベリア社会の中のテイグ

#### 1. 経済的成功と文化活動

1830年代、テイグは様々な方面で活躍した。1824年にアメリカ植民協会のガーリーが黒人たちによる諮問委員会を設置し、彼らの声をアメリカ植民協会の施政に反映させる体制をつくったことは先ほど述べたとおりだが、1835年、テイグはその委員に選出されている (Burrowes 1999: 21)。その

ことは、テイグが政治の分野で黒人たちのリーダー格になっていたということの意味しよう。

ビジネスの分野でも、テイグは成功を収めていた。1838年に父コリンがこの世を去ると、テイグは父の貿易事業を引き継ぎ、瞬く間にビジネスを拡大させた。少なくとも8隻の船を所有した上で、30,000ドルの価値をもつ倉庫をモンロビアの港に5つもち、20,000ドル相当の物資を在庫で抱えていたというから、貿易業で「大成功した」といってもよからう。また、1845年の時点でテイグはモンロビアに5つの建物を所有し、年間7,000ドルもの家賃収入を得ていたので、不動産業でも成功していた (ibid.:21)。更に、父の跡を継いでモンロビア・バプティスト教会の牧師になり、熱心な宗教家としての活動も続けると同時に、リベリア文化会館の初代館長に就任するなど、宗教的・文化的な活動でも頭角を現した (ibid.:22)。これらのことから分かるのは、テイグがリベリア社会の様々な方面で才能を発揮し、影響力のある人物になっていたということである。

## 2. ジャーナリストとしての活動

リベリア社会におけるテイグの影響力を考えた場合、上記の要因以上に重要なのは、当時のリベリアで最も広く読まれた新聞、*Liberia Herald* の編集者として論壇を張っていたことであろう。*Liberia Herald* は、1826年に白人印刷業者のチャールズ・フォース (Charles Force) が創刊した週刊新聞である。アメリカ植民協会が資金を出したので、所有は当該協会であった。編集者のフォースがすぐに病死したため、1826年に創刊した *Liberia Herald* は、初号のみ発行されたままだった。(McGraw 2007: 157)。

1829年にアメリカからジョン・ラスウォームがモンロビアに移住してくると、彼が *Liberia Herald* の事業を引き継ぐことになった (McGraw

2007: 156-157)。ラスウォームはサムエル・コーニッシュと共にニューヨークで *Freedoms Journal* を創刊した黒人ジャーナリストであった。デヴィッド・ウォーカーがその創刊と運営に深く関わり、同志としてジャーナリズム活動に力を入れていたことも知られている。1827年3月に創刊されたその「アメリカ初の黒人新聞」、*Freedoms Journal* は、「黒人の自由」と「黒人の生活と地位の向上」に資することをモットーにし、アメリカ北部の自由黒人によって広く読まれた。ウォーカーがマサチューセッツ全黒人協会で行ったスピーチが、同紙に掲載されたこともある (Hinks 2000: 85-89)。興味深いのは、黒人たちがアメリカで革命を起し、「黒人のアメリカ」をアメリカ国内で建設することをウォーカーが *Appeal* で訴えた1829年、ラスウォームがリベリアに移住していることである。いわば、ウォーカーがアメリカ国内でブラック・ネーションを建設しようとしたのに対し、ラスウォームは西アフリカでそれをしようとしたのである。そのような経緯をもつラスウォームがリベリアで *Liberia Herald* を引き継ぎ、編集者となったのだ。このような経緯を考えれば、ラスウォームの *Liberia Herald* は、*Freedoms Journal* やウォーカーの *Appeal* に包含される「黒人の自由」、「黒人の独立」というアイデアを継承する新聞だったと考えてもよからう。

テイグは、1835年にそのラスウォームから *Liberia Herald* を引き継ぎ、編集者となった (McGraw 2007: 157)。テイグが *Liberia Herald* を引き継いだのは、まさにラスウォームやウォーカーのスピリットを継承するためだったといえよう。実は、ラスウォームが *Liberia Herald* の編集者をやめたのは、植民地の司法制度のあり方をめぐって、新聞の所有者であるアメリカ植民協会と激しく対立したからであった。要するにラスウォームは、司法制度のあり方をめぐって黒人側につき、アメリカ植民協会に反抗したという理由で、編集者をクビになったのである。その後継者として編集者

に就任したテイグは、アメリカ植民協会に従順であるべきだった。しかし違った。テイグは、黒人側と連携し、黒人たちの利益を守るような論壇を張ったのである (*ibid.*: 157)。

テイグは、アメリカ植民協会による圧力を受けつつ、新聞の自由を懸命に守ろうとした。しばしばアメリカ植民協会に対して批判的な論壇を張ったので、当然のことながら、アメリカ植民協会から苦情が寄せられた。その苦情に対するテイグの返答が手紙で残っている。

私は、ある種の感情を他の黒人たちと共有している。これらの感情は、あまり表に出してしまうとよい影響を及ぼさない可能性がある。むしろ、害を及ぼすことになるだろう。したがって、今は私自身の心の中に留めておくことにする。しかし、正義と名誉がそれを要求するときに備えて、そのような感情をもち、表現する権利を温存しておこう。もし仮に、それが不可譲の権利であるという認識を一時でも忘れようものなら、あなた方の私に対する尊敬の念と信頼は、一切価値のないものになってしまうだろう<sup>13)</sup>。

ここでテイグが言う「ある種の感情」とは、直接的な表現は避けているが、紛れもなくアメリカ植民協会に対する「批判的な感情」である。それを「他の黒人たちと共有している」としながらも、「害を及ぼすことになる」ので、その批判的な感情を今は抑えておくと言っている。ただし、そのような批判的感情をもち、表現する権利はあるのだから、黒人たちの正義と名誉が傷つけられようものなら、その権利を行使することを忘れるべきではない。むしろ、その権利を意識しているからこそ、黒人たちはアメリカ

---

13) 'Letter from Mr. Teage,' in *African Repository* (1841), p. 95.

植民協会から敬意を払われるのだとテイグは考えている。要するに、テイグはアメリカ植民協会に対して批判的な感情を抱いていることを認める一方、他方で場合によってはそれを紙面上で表現することを「不可譲の権利」として主張したのである。

テイグは、*New York Tribune*, *Boston Cultivator*, *Virginia Republican* などアメリカ各地の新聞だけでなく、イギリスの *Westminster Review*, ハイチの特派員からの記事を *Liberia Herald* の紙面上に掲載した。そして、彼自身の社説では、リベリア内だけでなく、欧米やハイチの政治状況に深く切り込んだ論考を掲載し続けた (Burrowes 2004: 26)。テイグは *Liberia Herald* をプラットフォームにして、「自由」と「独立」に関するアイデアを黒人たちに啓蒙する一方、他方でアメリカ植民協会に対して「黒人側の立場」を主張した。白人たちからも、アメリカ本土の編集者と比べてテイグの「知識は遜色なく、その率直な物言いはより優れていた」と評されている<sup>14)</sup>。*Liberia Herald* を単なるアメリカ植民協会の機関誌にせず、「黒人側の立場」で論壇を張ったテイグの努力と意志の強さは、主たる読者の黒人たちに大きな影響を与えたに違いない。

## 第4節 独立に向けた動き

### 1. 権利委譲の要求

1821年にノーチラス号で西アフリカに上陸した33名の黒人たちは独立志向が強く、自分たちがある種の「主権的共同体」であると考えていたことは既に述べたとおりである。その意味で、その中のひとりだったテイグが

---

14) 'African Colonization,' *African Repository*, 1847, p. 37.

ナショナリスティックな思考をもっていたのは自然である。ただ、テイグが執筆した「モンロビア草案」(1838)や「リベリア独立宣言」(1847)に見られるように(後で詳しく述べる)、1930年代後半から1840年代にかけて、アメリカ植民協会からの独立を求めるような意識が高まったことは確かである。それには、次のような背景があったと考えられる。

アメリカ植民協会との間で権力闘争が繰り広げられる中で、確かに黒人たちに対する権利の委譲が進んだ。そして権利の委譲が進めば進むほど、更なる権利の委譲を求めるようになった。しかし、どこまで権利の委譲が進んでも、リベリアは黒人たちが主権者となる「ブラック・ネーション」ではなく、その国際的な地位は結局のところアメリカ植民協会が管理する植民地であった。ところが黒人たちは、彼らがりベリアで自治政府を樹立し、独立国家になることは当然の権利だと考えるようになっていた。1830年代後半から1940年代にかけてテイグがナショナリスティックな思考を強めていったのは、黒人たちが「ブラック・ネーション」を建設する権利を強く意識する一方、他方で白人組織の一植民地の地位に甘んじなければならないという「権利意識ギャップ」があったからであった。リベリアの黒人たちはもはや、彼らのネーション・ステートを建設しなければ満足できなかったのである。

1824年夏、アメリカ植民協会が黒人たちによって構成される諮問委員会を創設し、政策決定に関して代表者を出す権利を黒人たちに与えたことは既に述べたとおりである。これは、1823年の末にケアリー率いる黒人たちが、アメリカ植民協会のエージェントであるアイレス博士やアシュマンに反抗し、メスラド植民地で「クーデター」を成功させたのを受けてのことであった。その後も黒人たちによる権利の要求は続き、アメリカ植民協会が指名する総督(アシュマン)の下に黒人の代表を副総督として1名置くこと、法廷に2名の黒人裁判官を採用することになった(July 1968: 91)。

アメリカ植民協会がより大きな権利の委譲を迫られ、それに応じたのは1834年のことであった。まず、黒人から選ばれる諮問委員の数が大幅に増やされ、様々な行政職長官に任命された。そして彼らは植民地運営のための予算案はもちろん、全般的な公共福祉に関する立法の権利をも得ることに成功した。ただし、アメリカ植民協会の白人エージェントによって占められる、事実上の最高権力機関である管理者評議会に拒否権があったため、最終的にはアメリカ植民協会の意向というものが植民地全体の政治を左右した (*ibid.*: 91-92)。とはいえ、1834年の時点で黒人たちはかなり高度な自治権を得たということになる。

## 2. テイグの「モンロビア草案」とアメリカ植民協会の「リベリア連邦憲法」

高度な自治権を得ても、黒人たちは満足しなかった。彼らが期待していたことと、まだギャップがあったからである。1830年代、リベリア植民地の人口の増加と領土の拡大にともない、アメリカ植民協会はそれに対応できる法律を整備する必要に迫られていた<sup>15)</sup>。そして1838年、アメリカ植民協会は諮問委員に意見を求めた。その結果、——少なくともアメリカ植民協会側からすれば——予想外のことが起きた。黒人たちは、「意見を出す」という行為を飛び越えて、「リベリア憲法」を起草し、それをアメリカ植民協会に提案したのである (Burrowes 2004: 39)。9名の黒人たちが連名

---

15) アメリカ植民協会は、1830年までに、メスラド植民地を含むモンロビア周辺に1420人の黒人を移住させた (Franklin 1978: 183)。1846年には、リベリアの海岸沿い400kmに点在する先住民の村々の近くに13カ所の植民地があり (モンロビア周辺が最も多く7カ所)、リベリア・エミグレーション運動の受け皿となった (Burrowes 2004: 23)。これらの植民地が基になって1847年に独立し、後にリベリア共和国になったのは周知のとおりである。1850年の時点で、人口 (先住民を除く) は3000人ほどであった (July 1968: 88)。

でそれを提出しているが、テイグとテイグの父コリンもその中に入っている<sup>16)</sup>。しばしば「モンロビア草案」(Monrovia Draft) とよばれるその新憲法草案によれば、「アメリカ植民協会の権力の行使は、リベリアが独立するまでのものであること」、「リベリアの市民権は黒人のみに与えられること」などが記されていた<sup>17)</sup>。

全5章からなるその「モンロビア草案」の第1章、*Prerogatives of the Society* には、アメリカ植民協会の権限が書かれている。その第1条は、次のように記している。

アメリカ植民協会が植民地の管理から撤退し、そのすべてを植民地の人々に明け渡すときがくるまで、アメリカ植民協会は、アフリカにおいて当該協会が所有するか、または今後獲得する領土内において、最高権力を有するものとする。

また、第3条では次のように記している。

自分たち自身の総督 (governor) を任命する権利を人々に与えるのが適切だと考えるときがくるまで、アメリカ植民協会は植民地の総督を任命する唯一の権限をもつ。

これらの表現を見ると、テイグたちは確かにアメリカ植民協会の権限を認

---

16) 「リベリア憲法」を起草した翌年、テイグの父コリンは死去している。マックローによれば、テイグは当時商務長官 (Secretary of Commerce) だった (McGraw 2007: 159)。リベリア社会におけるテイグ親子の影響力が大きかったことは確実である。

17) 全文が1839年3月15日の *Africa's Luminary* (リベリアで発行されていた新聞で、テイグの *Liberia Herald* のライバル紙だった) に掲載されている。ここではそのPDFコピーを参考にして (インターネットからのダウンロード)。



めている。アメリカ植民協会が、リベリア植民地における最高権力で、総督を任命する唯一の機関であることを認めている。しかし、それは永久にそうではなく、期間が限定されている。テイグたちは、植民協会がいずれリベリアから撤退し、「そのすべてを植民地の人々（黒人たち）に明け渡し」、「自分たち自身の総督を任命する権利を人々（黒人たち）に与える」ということをわざわざ記した上で、そのときがくるまで、アメリカ植民協会の権限を認めているのである。このことは、先述した「1820年規約」にも記されていたので、テイグはそれを「モンロビア草案」の中で念を押し格好になる。これは、黒人たちが将来的に独立することを再確認したようなものである。

「モンロビア草案」の第2章、*Rights and Immunities of the People* には、黒人たちの権利が書かれている。その第1条にはリベリアに住む黒人（colored persons）は全て自由であること、第2条にはリベリアに移民する全ての黒人は市民としての特権が付与されることが記されている。そして第3条に次のことが記されている。

リベリアの市民になることができるは、黒人のみである。

これらの記述から、*Rights and Immunities of the People* の「ピープル」が「黒人」（colored persons）を指していることが分かる。「ピープル」に、白人たちは含まれない。テイグらがここでイメージしているのは、紛れもなく「ブラック・ネーション」である。「モンロビア草案」の第1章で将来的にリベリアを独立させる意図を示したが、その独立とは「ブラック・ネーション」の独立であり、第2章ではそのことを明確に述べたのであった。テイグら黒人が希求していたのは、まさにそれであった。その希望がかなえられない限り、彼らは満足できないことがそこに示されていた。

1838年にテイグらが「モンロビア草案」をアメリカ植民協会に提出すると、アメリカ植民協会側は慌てて自らの憲法草案を作成し、1839年の1月に早々とそれを採択してしまった。「リベリア連邦憲法」(Constitution of the Commonwealth of Liberia)として採択されたその憲法には、黒人たちがブラック・ネーションとして独立することを想定した内容は全く含まれていなかった。アメリカ植民協会側のスタンスは、その前文に示されている。

アメリカ植民協会は、協会の保護下にある西アフリカ沿岸の植民地に対し、次の憲法をここに与える。

西アフリカ沿岸の植民地、すなわちリベリアは、「協会の保護下」(under its care)にある。これがアメリカ植民協会のスタンスであり、リベリアから撤退する意図がないことをここで宣言している。その上で、黒人たちに新たな憲法を「与える」と記している。第1章は次のように記されている。

アメリカ植民協会によって建設され、その規約を承認したモンロビア、ニュー・ジョージア・カルドウェル、ミルズバーグ、マーシャル、ベクスレイ、ボサ・ケープ、エディナ、そしてその他のアフリカ西岸の植民地は、リベリア連邦という共通の名称のもとに、ひとつの政府によってここに結ばれる。

この第1章を見ると、名目上あたかも「リベリア連邦」という国家の成立を宣言しているかのようである。もしそうだとしたら、黒人たちはアメリカ植民協会にそれを「与えられた」ということになる。ただし、「協会の

保護下」にあるので、實際上、独立した政体ではない。

第2章は、次のように記されている。

ここに与えられる全ての立法権は、リベリアの総督と議会にある。ただし、制定された全ての法律は、アメリカ植民協会によって廃止される対象となる。

リベリアの総督はアメリカ植民協会によって任命されるので、アメリカ植民協会は確実にここで影響力を発揮できる。一方、議会の議員は選挙によって選出されるため、黒人たちの声がより反映される体制が導入されている。その意味で、黒人たちの権利の拡大がここに含まれている。ところが、アメリカ植民協会はその議会によって制定された法律を廃止する権限をもつので、結局のところ最高権力の地位を保持した。

テイグたちが1838年に起草した「モンロビア草案」は闇に葬られ、アメリカ植民協会が作成した「リベリア連邦憲法」が1839年に採択された。それが意味するのは、テイグら黒人たちがアメリカ植民協会から近い将来独立し、リベリアにブラック・ネーションを建設するヴィジョンを示して期待感を高める一方、他方でアメリカ植民協会はそれを無視し、最高権力の地位を保持しようとしたということである。換言すれば、黒人たちがブラック・ネーションを建設する権利を主張する一方、他方でアメリカ植民協会はそれを否定し、自分たちの権力を保持することに努めたということである。黒人たちの間に「権利意識のギャップ」が残ったのは、当然であった。その後の独立に向けた動きは、その「権利意識のギャップ」を埋める努力の中で生じたものであった。

### 3. *Liberia Herald* での論壇

テイグが1835年に *Liberia Herald* の編集長になったということは既に述べた。テイグは、「リベリア連邦憲法」が採択された1839年、*Liberia Herald* の所有権をアメリカ植民協会から買い取った (Burrowes 2004: 27)。ビジネスにも成功して個人的な財力もあり、当時すでに政治的・社会的地位が高かったので、それが可能だったのであろう。*Liberia Herald* の所有者兼編集者になったテイグは、よりナショナリスティックな表現を使ってリベリアの黒人たちにメッセージを送るようになる。ここでは、1842年12月に *Liberia Herald* に掲載されたテイグの ‘Land of the mighty dead!’ と題する詩の最初の部分を紹介したいと思う。

強大な死者の土地よ  
かつてはここで科学の知識が生まれ  
芸術によって人々を魅了した  
恐れられたファラオが土地を支配し  
強大な諸ネーションはひれ伏し  
遠い地の王たちは武器を置くばかりであった

まず、「強大な死者の土地」(land of mighty dead) という表現だが、それが具体的にどこを指しているのかははっきりとしない。ファラオに言及していることから、エジプトとも考えられるが、テイグが住むリベリアは西アフリカである。恐らく、どことは特定していないものの、テイグは「黒人」と「アフリカ人」を結び付け、汎アフリカニズム的にブラック・ネーションをイメージしていたのだと思われる。したがって、「強大な死者の土地」とは「黒人の土地」を意味し、漠然とアフリカを指していると言っ

てよかろう。

アフリカには、強大なファラオがいた。今となっては「死者」のように静かにしているが、かつては「科学の知識が生まれ」、「芸術によって人々を魅了した」。また、強大な諸ネーションや王たちはことごとく服従し、武器をとることはなかった。ティグは、太古に栄えたエジプト文明を「アフリカの文明」または「黒人の文明」として描き出し、黒人たちがいかに「強大」で、「栄光の歴史」を有するかを訴えた。ここに見られるのは、汎アフリカニズム的な色彩がつよい、ブラック・ネーションの賛美である。ただし、それは「かつて」の話であって、今は「死者の土地」である。だからティグは次のように呼びかける。

名誉を再び取り戻せ！

皆叫べ、リベリア！

アフリカは、かつての名誉が失われ、「死者の土地」になってしまった。だからそれを取り戻さなければならない。そしてリベリアこそが、ふたたびアフリカと黒人に繁栄と榮譽をもたらす希望の地である。だから「リベリア！」という掛け声で、一致団結しよう。これが、ティグのメッセージであった。「過去の栄光」を賛美し、それを取り戻すために一致団結することを訴えるティグの詩は、ナショナリスティックな色彩を帯びていた。

1840年代前半にティグがブラック・ネーションの建設を現実的視野に入れていたのは確かで、1844年の *Liberia Herald* に掲載された 'The Colony of Liberia' と題する社説を見ればそのことがよく分かる。その社説は、ひとつの論文ほどの長さをもつので「論説」と言った方が適切かもしれない。その4分の3はリベリア植民地の歴史を当たり障りなく解説したものである。注目すべきは最後の4分の1で、黒人による「自治政府」

(self-government) の樹立を訴えた箇所である。

我々の地位の向上に反対する人々の陳腐な推測によれば、我々黒人は自治政府 (self-government) をもつ能力に欠けているという。ここで少し立ち止まって考えてもらいたい。数億の人口を有するアフリカには、いたるところに政府と法律があり、そのような悪意ある推測を否定するだけの事実が存在する。〔中略〕。我々の社会、市政、政治秩序、議会、そして司法裁判所をよく見てもらえば分かるはずである。その状態が、初期的な自治政府が定着した結果であることを<sup>18)</sup>。

ここでテイグがいう「我々の地位の向上に反対する人々」とは、アメリカ植民協会の白人たちのことである。彼らは事あるごとにリベリア植民地の運営に口を挟んできたし、黒人たちの自治を制限してきたからである。黒人たちが自治政府をもつことに関して白人たちが反対する理由は、「黒人は自治政府もつ能力に欠けているという」というものだが、テイグからすればそれはナンセンスである。なぜなら、リベリアでは既に、「初期的な自治政府が定着」していたからである。先述したように、黒人たちは議会を通じて立法を行っていたし、司法や行政においても、重要なポストで実務を担っていた。更に、リベリア総督だったトマス・ブキャナン (Thomas Buchanan) が1841年に病死したため、副総督だったジョセフ・ロバーツ (Joseph Roberts) が黒人として初めて総督に昇格し、アメリカ植民協会から直接的な影響を受け続けたものの、名目上黒人がリベリア行政のトップに就いていた (McGraw 2007: 159)。テイグからすれば、1844

---

18) ここでのテイグの資料は、1844年9月発行の *African Repository* に転載された *Liberia Herald* の記事を使用している。

年の時点でリベリア社会の黒人たちは既に「初期的な自治政府」を運営していた。したがって、「自治政府をもつ能力に欠けている」というのは、ナンセンスであった。テイグからみれば、黒人たちは自治政府をもつ能力を既にもっているものであり、そう遠くない将来に国家として独立するのは十分可能なことであった。

#### 4. ヨーロッパ列強の影響

独立への動きを加速させたのは、イギリスやフランスの貿易商による、アメリカ植民協会の権威に対する脅威であった。アメリカ植民協会が1839年に「リベリア連邦憲法」の施行を急いだのは、テイグら黒人たちが「モンロビア草案」を前年に提出してきたということもあったが、アメリカ植民協会が保護する植民地が増えつつあったリベリア沿岸でイギリスやフランスの貿易商に勝手なことをさせないためでもあった。アメリカ植民協会は、「リベリア連邦憲法」の発布によって、リベリア沿岸の植民地をひとつにまとめ上げ、「リベリア連邦」という政体の誕生を宣言した。これは、ある意味で、主権国家建国の宣言である。国家としての主権を宣言することで、イギリス人やフランス人の活動を制限しようとしたのである。

当時の総督ブキャナンは、「リベリア連邦憲法」の発布でリベリア連邦の成立を事実上宣言した上で、リベリアの貿易をモンロビアとボサ・ケープの二港に制限した。貿易の港を2つに制限したことにより、ブキャナン総督はイギリスとフランスの貿易商から強い反感を買った。特にイギリスの貿易商は強硬で、アメリカ植民協会が定めた関税の支払いを拒否し、賄賂を使うことによってビジネスを続けた。アメリカ植民協会からすれば、イギリスの貿易商はリベリアの主権を侵害していたので、厳しく処罰されるべきだった。イギリス人貿易商との間の摩擦が高まると、当初沈黙を守っていたイギリス政府が動きだし、外交問題に発展した (McGraw 2007:

164)。

アメリカ植民協会は、苦しい立場に置かれていた。なぜなら、独立を宣言した「リベリア連邦」は、アメリカ本国はおろか、どの国からも承認されていなかったからである。正規の外交ルートを通じてイギリス政府がアメリカ政府にリベリアの地位を確認すると、アメリカ政府はリベリア植民地に対して一切の責任をもたないことを宣言した。確かにアメリカ政府はアメリカ植民協会の活動を支援してきたが、当初からリベリアをアメリカの植民地にするつもりはなかった (Mills 2014: 86)<sup>19)</sup>。さらに、アメリカ政府は、イギリスやフランスなどの帝国主義列強国と植民地を巡って争うことを望まなかったので、積極的に介入してくる様子を見せなかった (Temperley 2000: 69)。それを知ったイギリスと他国の貿易商は、関税や波止場使用料を支払うことなく、先住民との交易を続けた。1844年、イギリス商船のウィリアム・ジョーンズ船長は、アメリカ植民協会に対して「イギリス人は自由に商売することを許されるべきである、なぜならリベリアには、関税を課し、外国人の貿易を制限する権利などないのだから」と彼らの立場を表明した。そしてこれに対してアメリカ植民協会は、リベリアは既に主権国家であり、その地位について何か特別な措置をとる必要はないという立場を崩さなかった。1845年4月、アメリカ植民協会の代表ジョセフ・トレイシー (Joseph Tracy) は、あえて独立宣言を行うべきだという意見が出る中で、「その必要はまったくない」と断言し、「リベリア連邦は、自らの憲法、政府、法律をもち、主権に不可欠な権力、権利、特権を有する主権国家である」と主張した (Mills 2014: 86-87)。要するに、

19) ミルズによれば、「リベリアをアメリカの領土にすべきではない」という方針はモンロー政権 (1817-1825) のときに決まっていた。当時の国務長官だったジョン・クインシー・アダムスが、リベリア植民地をアメリカが保持するのは経済的にも大きな負担になるし、憲法にそぐわない植民地システムをつくってしまうことになるという見解を示し、その方針が決まったという (Mills 2007: 86)。



諸外国が「リベリアは単なる私的な会社や植民者の集まり」であると断じたのに対し、アメリカ植民協会は「リベリアは主権国家なのだから、自国の貿易を管理する権力、権利、特権がある」と主張したのである。アメリカ植民協会が苦境に立たされたのは、本国アメリカがリベリア問題を巡って他国と対峙する姿勢を見せなかったため、「リベリア連邦憲法」で主張したはずの主権を諸外国に認めてもらうことができなかったからである (Temperley 2000: 69)。リベリアの国家としての地位を保障するためには、「主権の確立」が不可欠になった。

この展開に最も強い不満と危機感を抱いたのは、リベリアの黒人植民者たちであったに違いない。もしこのまま外国の貿易商がリベリア各地で法律や規則に従わずに活動が続けたら、将来彼らがネーション・ステートを建設するときには必ず障害となる。外国政府からの内政干渉も十分に予測できた。リベリアの法的地位と貿易の問題がこのように大きくなる中で、1846年12月、テイグはスピーチを行い、その原稿を *Liberia Herald* に掲載した<sup>20</sup>。

同胞市民よ！我々はかつて誰も経験したことがない立場に立たされている。我々がどれだけ取るに足らない集団だと自分たちで思っていたとしても、ヨーロッパやアメリカは我々に注目しているのだ。我々は、地上に爆発するように生れ出る運命にあるつぼみである。〔中略〕。同胞市民よ、立ち上がれ！アフリカ人種が限りなき墮落の運命にあるのか否か、答えを出すときが来たのだ。

まず「同胞市民」及び「我々」が誰を指しているかだが、下で「アフリカ

---

20) 1846年12月のテイグのスピーチは、翌年2月の *Liberia Herald* に掲載された (Mills 2007: 88)。

人種」(African race)と述べていることから、それは明らかに黒人を指している。そしてその黒人たちが「かつて経験したことがない立場」に置かれているという。どのような立場か。それはやはり、リベリアの黒人たちがネーションとして独立を宣言するか否か、という立場であろう。このスピーチが行われた六か月後に、アフリカで初めて黒人たちが主権国家として独立を宣言したこと(確かにそれはかつてない経験だった)を考えれば、そのように理解してもよからう。ヨーロッパやアメリカが注目していたのは、まさにそれであった。「地上に爆発するように生れ出る運命にあるつぼみ(a germ)」とは、彼らの「ネーションとしてのつぼみ」を意味しているのであり、それが今にも開花しようとしていることをイメージさせる。しかもそれは、「アフリカ人種」のネーションであり、汎アフリカニズム的なブラック・ネーションの誕生を意味する。黒人たちによるリベリア独立への動きを加速させたのは、イギリスやフランスの貿易商による、アメリカ植民協会の権威に対する脅威であった。黒人たちにとっても、外国貿易商の活動は、ネーション・ステートを建設しようとしている彼らの努力を台無しにしてしまうほどの脅威に思えたに違いない。アメリカ植民協会がもたもたしているのを、待つことはできなかった。テイグにとって、「答えを出すときが来た」のだ。その答えとは、テイグによって草案され、1847年7月に発表された「リベリア独立宣言」であった。

## 第5節 リベリアの独立

### 1. リベリア独立までの流れ

アメリカ植民協会は、黒人たちによって推し進められた1847年のリベリアの独立に関して、激しく反対するようなことはしなかった。ひとつには、

1820年の規約に記されていたように、アメリカ植民協会によるリベリア統治は、その「エージェントを引き揚げさせ、植民者（黒人たち）に彼ら自身の政府をもたせるまで」に限定していたのであって、そもそもの前提として、「黒人たちの独立」が想定されていたという点が挙げられる。アメリカ植民協会には設立当初から人道主義・博愛主義の観点と奴隷制度の維持を確実にしたい南部政治家たちの観点が両方存在したということは既に述べたが、どちらにしても、「リベリアがアメリカの黒人たちの受け皿になる」ということが一番重要なことであった。したがって、リベリアの黒人たちがそれを妨げないかぎり、アメリカ植民協会が「エージェントを引き揚げさせ、黒人たちが彼ら自身の政府をもつ」ことはあり得た。問題は、いつそれをするかということであった。

また、貿易をめぐる諸外国からの干渉圧力が増す中でアメリカ植民協会がリベリアの主権を主張したところで、本国のアメリカ政府が本気でコミットし、リベリア連邦の主権を守るようなことをしない限り、諸外国から「単なる私的な会社や植民者の集まり」と言われることは目に見えていた。「リベリアの主権が誰に属するのか」という問題を諸外国から突き付けられても、アメリカ植民協会はそれに対して納得いく答えを出すことはできなかった。

黒人リーダーたちはこの状況をチャンスと受け止め、独立を達成しようとした。案の定、黒人リーダーたちがアメリカ植民協会およびアメリカ政府と協議した際、独立に激しく反対されることはなかった（July 1968: 98）。少なくともアメリカ植民協会ではなく、黒人たち自身が「主権のピープル」の名のもとに独立を宣言し、リベリアを建国すれば、諸外国はリベリアの「正当性ある主権」を認める可能性はあった。実際、イギリスとフランスは「リベリア独立宣言」の翌年（1848年）にリベリア共和国の独立を承認している。そして1849年には、ポルトガル、オーストリア、デン

マーク、スウェーデン、ノルウェーなどのヨーロッパ諸国、そしてブラジルやハイチなどかつて植民地だった国家がリベリアの独立を承認した<sup>21)</sup>。テイグら黒人リーダーたちが独立宣言と憲法の草案を準備する中、アメリカ植民協会はハーバード大学教授でマサチューセッツ州判事のシモン・グリーンリーフ (Simon Greenleaf) を起用し、1846年6月にそれを手助けするよう申し出ている (Temperley 2000: 69)。そして1847年に1月にリベリア各地から12名の代表が集まり、憲法会議を開催した。グリーンリーフから助言を受けつつ、憲法会議のメンバーはリベリア憲法草案を練り上げ、テイグは独立宣言を起草することになった。1847年7月のリベリア独立宣言とリベリア憲法の公布は、誰も血を流すことなく達成された。

## 2. 「リベリア独立宣言」

テイグが起草した「リベリア独立宣言」で最初に書かれているのは、いかにリベリアの独立が正当であるかということである。強調されているのは、次のくだけりである。

リベリア共和国の代表である我々は、新たな政府を樹立する権威を与える会議において、偉大なる裁断者（神）の援助とご加護のもと、リベリア共和国という名称をもつこの共和国が、自由で、主権を有する独立国家であることを、ピープルの名において、ピ

---

21) アメリカ政府は、1862年までリベリアとハイチを国家として承認しなかった。主たる理由は、南部奴隷州の政治家たちが「黒人に自治能力がある」ことを認めたくなかったこと、ワシントン DC に黒人の大使を置くことに反対したことなどが挙げられる (Mills 2014: 106)。南北戦争が1861年に勃発し、南部の奴隷解放を視野に入れたリンカーン大統領が「リベリアとハイチの独立を承認しない理由は、どこにも見当たらない」とし、両国を承認することになった。'Recognition of Haytian and Liberian Independence A Step in Advance,' *The New York Times*, February 5, 1862.

ープルを代表して宣言する。

ここでリベリアの独立を宣言しているのは会議のメンバーである「我々」だが、それは「ピープルの名において、ピープルを代表して宣言」されている。すなわち、本来的に「ピープル」が独立を宣言していることを示している。これは、1776年のアメリカ独立宣言の文言と重なる。

われわれアメリカ連合諸邦の代表は、連合会議に参集し、われわれの企図の公正なことを世界の至高の裁判官に訴え、これらの植民地のよき人民（ピープル）の名において、その権威によって、次のごとく厳粛に公布し宣言するものである。すなわち、これらの連合した諸植民地は自由にして独立な国家であり、また権利として当然そうあるべきである<sup>22)</sup>。

このように、リベリアとアメリカの独立宣言の文言で共通するのは、「ピープルの名において、その権威によって」、独立宣言の正当性を得ていることである<sup>23)</sup>。すなわち、両方とも「主権的ピープル」というアイデアに

---

22) 「アメリカ独立宣言」(1776)『アメリカ革命』斎藤真也他訳、研究社、1978年、143頁。

23) 独立宣言の正当性を得る上で、「神の祝福を受けている」という部分も共通している。「リベリア独立宣言」では「偉大なる裁断者（神）の援助とご加護のもと」と述べ、「アメリカ独立宣言」では「われわれの企図の公正なことを世界の至高の裁判官（神）に訴え」と述べている。これは、もちろん偶然ではない。もともとイングランドに起源をもつ「主権的ピープル」というイデオロギーは、王権神授説を根拠に自らの主権を主張した国王に対抗するために、ジェントリーやヨーマンなどの新興エリートたちが同じように「神の承認」を受けた「主権的ピープル」という概念を編み出すことによって成立した。それがアメリカに引き継がれ、それをリベリアの黒人たちが模倣したのであるから、「神の祝福を受けている」という部分が共通していても不思議ではない。

基づき、その主権の正当性によって独立を宣言していたのだ。もちろん、それは偶然ではない。グリーンリーフ教授の助言がどのようなものであったとしても、テイグがアメリカ独立宣言を熟読し、それをモデルにしたことはほぼ間違いないからである。もちろん、次のような文言もリベリア独立宣言に含まれている。

我々は、すべての人間に不可譲の権利があることを認める。それらには、生命、自由、財産を保持しそれを守る権利が含まれる。

テイグがアメリカ独立宣言の文言をモデルにし、リベリア独立の正当性を得ようとしていたことは確かである。

「ピープルの名において」宣言されたリベリア独立だが、その「ピープル」とは誰を指していたのか。テイグが「ピープル」という語を使った際、それが漠然と「黒人」(colored persons)を指していたことは既に述べた。ところが、独立宣言においては、より限定的な定義が示されている。

我々、リベリア共和国のピープルは、もとは北アメリカ合衆国の住人だった。

テイグが独立宣言で示した「ピープル」は、黒人であることは確かだが、アフリカの先住民が含まれなかった。すなわちそれは、アメリカ合衆国からリベリアに移住した黒人を指していた。テイグは以前、汎アフリカニズム的に「黒人」を「アフリカ人」と同一視する傾向があったが、ここにきて「ピープル」の定義を「アメリカン・ブラック」に限定したのである。その意味で、リベリアの独立は、まさしく「アメリカン・ブラック・ナショナリズム」の一例だったといえよう。

「ピープル」を「アメリカン・ブラック」に限定しようとしたのはなぜか。それは、リベリアが独立する正当性と関係していたと考えられる。テイグが「自由」や「ピープルの主権」という概念によってリベリア独立の正当性を確保しようとしたことは先ほど述べたとおりである。彼がリベリア独立の正当性を担保するにあたって加えて言及したのは、「アメリカで黒人たちの権利がいかに侵害され続けてきたか」ということであった。「ピープル」を「アメリカン・ブラック」に限定した直後に以下のようなくだりが続く。

その国（アメリカ）のある場所で、我々は人間に与えられる全ての権利および特権を法律によって剥奪された。他の場所では、法律よりもはるかに強力な民心が我々を抑圧した。我々は政府の全ての活動から除外された。我々は、同意なしに税金を徴収された。我々は、我々をまったく保護してくれない国の財源に貢献することを強要された。

このように、「黒人たちがいかに権利を剥奪され続けてきたか」が延々と訴えられる<sup>24)</sup>。ここで注目すべきは、彼らが母国アメリカのことをここで述べていることである。彼らがここで訴えているのは、他でもないアメリカという国において、「黒人たちがいかに権利を剥奪され続けてきたか」であった。その上で、次のように続く。

我々は抗議をしたが、まったく聞き入れてもらえなかった。そし

---

24) ティグはこの部分についてもアメリカ独立宣言を参考にしたと思われる。アメリカ独立宣言も、イギリスがいかにアメリカに住む人々の権利を剥奪・侵害したかを延々と述べている。

て、そのアメリカの異常な制度がただ確認されるだけであった。我々の国（アメリカ）においてよい変化が現れるであろうという全ての希望は、このように、我々の胸の中で全部失われてしまった。よって我々は、深く貶められたこの状況から逃れるべき避難所を一生懸命に探したのである。

第1節で述べたとおり、19世紀前半の本国アメリカは、南部で奴隷黒人たちが過酷な生活に苦しみ、大小の反乱を頻繁に起こし、北部でも自由黒人たちの市民的地位が没落の一途をたどる時代だった。特に南部の白人は奴隷制度に執着し、「財産」としての奴隷黒人の所有権を守り抜くために法律や制度を強化していき、南北の黒人たちが全体としてそのあおりを受けていた。独立宣言で述べているように、「我々の国」であるアメリカにおいて、黒人たちは権利を剥奪され続けていたのである。そして「抗議をしたが、まったく聞き入れてもらえなかった」。黒人たちには、「アメリカ人」としての「権利意識」があった。アメリカ人として、尊厳をもって扱われる権利、すなわち自由・平等に扱われる権利の意識があった。また、自らの代表を選ぶ権利、自らの声を政府で反映させる権利の意識があった。そして、それらの権利をアメリカ社会の中で求め続けた。要するに、彼らは「統合主義的マージナルマン」であった。しかし、アメリカ人であれば皆もつべきこれらの諸権利は、ことごとく侵害され続けたのであった。もつべき権利をことごとく侵害されることによって生じる「権利意識のギャップ」が、拡大しないはずはなかった。そして「よい変化が現れるであろうという全ての希望は」、黒人たちの間で「全て失われてしまった」。だからこそ、彼らはアメリカから離れる分離主義に走り、西アフリカに「避難所」を求めたのである。この流れからすると、彼らがりベリアに「避難所」を求め、そこに移住するという正当性は、彼らが「アメリカにおいて



権利を侵害され続けた」という理由に求められるのであった。リベリアをそのような「避難所」として考えた場合、そこに正当性を持って住むことができるのは、「アメリカにおいて権利を侵害され続けた」とされる「アメリカン・ブラック」であった。換言すれば、「アメリカン・ブラック」でなければ、「避難所」としてのリベリアに住み、独立を宣言する正当性はないということである。アメリカ出身のテイグや他の黒人たちの目から見れば、リベリアはまさにそのような場所であったに違いない。だから、テイグは「ピープル」を「アメリカ出身の黒人」に限定したのだ。

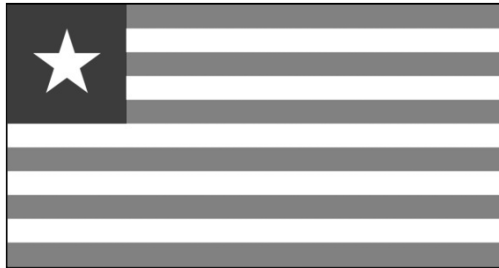
### 3. リベリアの国章と国旗

リベリア独立宣言の直前に制定されたとされる国章を見れば、これまで述べてきたことが象徴的に示されていることが分かる。



海に浮かぶ船は、アメリカ出身の黒人たちが、エリザベス号やノーチラス号のような船に乗ってリベリアに移住してきたことを示している。なぜ彼らはリベリアに移住してきたのか。それは、「自由への熱愛が我々をここに導いた」とあるように、アメリカ本土でことごとく侵害されつづけた

「自由」(様々な権利をこの一言にシンボリックに集約している)を得るためであった。この「自由を得る」ということこそが、リベリア共和国建設の原動力であると同時に、その正当性を担保するものであった。そしてその独立は、外交上反対されなかったにしても、アメリカ合衆国に向けられたのであった。すなわち、アメリカ合衆国から分離し、独立したということである。それをシンボリックに表しているのが、独立時に掲げられたリベリア共和国の国旗である。



リベリア国旗がアメリカ合衆国の国旗を真似てつくられたことは、一目で分かって。赤と白の11本のストライプは、独立宣言に署名した11名を表し、その中にテイグも含まれている。左上の青地は「自由」、その中の星はアフリカで唯一の独立国家、リベリア共和国を意味する。この国旗を見ると、リベリアは独立したものの、テイグらの意識が未だにアメリカに向けられていたことは確かである。また、未だに「一人前のアメリカ人として認めしてほしい」という思いがあったようにも思われる。テイグら黒人たちは、アメリカというホスト社会の信条を積極的に受け入れて、それとの統合を図ろうとする、「統合主義」の側面を有していた。しかし、アメリカ社会の現状は、結局彼らを「分離主義」に向かわせ、独立国家を求めさせるに至った。リベリア共和国の独立は、アメリカ出身の黒人によるブラック・ナショナリズムが唯一成功した例といえるが、リベリアの国旗は、そのことをシンボリックに表しているといえよう。

## 第6節 イデオロギーの力

### 1. 「主権的ピープル」のイデオロギーと分離独立

アメリカの植民地人がイギリス人だったにもかかわらず、1776年にイギリスから独立した理由について、L・グリーンフェルドは「彼らがイギリス人だったからこそ、そうしたのだ」とかつて述べた (Greenfeld 1992: 412)。それと同じような現象が、リベリアで起きた。すなわち、リベリアの黒人たちがアメリカから独立したのは、彼らがアメリカ人だったからこそ、そうしたのだ。アメリカ出身の黒人たちは、既に自分たちを「主権的ピープル」(sovereign people)として認識し、そのメンバーに平等に与えられるべき権利、すなわち「威厳ある存在として扱われる権利(特に、自由・平等に扱われる権利)」、「自分たちの代表を選ぶ権利」、「自分たちの声を政治に反映させることができる権利」を強く意識していた。彼らは、アメリカで生まれ育つことによってそれらの権利を教え込まれ、彼らの信条として強く内面化していた。その意味で、彼らはアメリカというホスト社会の信条を積極的に受け入れて、それとの統合を図ろうとする、「統合主義」の側面を有していた。ところが、彼らはホスト社会のアメリカから諸権利を認められず、「権利意識のギャップ」を強く感じ、その嘆かわしい状況に苦悩した。このように彼らは、「主権的ピープル」のメンバーとしての対象から疎外(marginalize)され、それが原因で苦悩している「マージナルマン」であった。通常、そのような「マージナルマン」は、自らの苦悩を解消するために、自らホスト社会の価値・信条体系を熱心に受け入れ学ぶ一方、他方でホスト社会の差別的・圧政的制度や習慣を変革し、ホスト社会の中でマジョリティと同じように権利を認めてもらうよう

求める「統合主義的」方策を模索する。ところが、「リベリア独立宣言」で、「我々は（アメリカで）抗議をしたが、まったく聞き入れてもらえなかった」と述べているように、ホスト社会を変革することは不可能だと考え、彼らの「権利意識のギャップ」が縮まるだろうという希望を全く見いだせないので、アメリカに対して完全に幻滅してしまった。だから彼らはアメリカに見切りをつけ、「分離主義」に走ったのだ。新天地のリベリアで、彼らは「権利意識のギャップ」に苦悩する「マージナルマン」の地位から脱し、「主権的ピープル」の地位が得られることを期待した。この努力こそが、彼らの「ブラック・ナショナリズム」の原動力となった。

ヨーロッパにその起源をもつ「自由・平等」というイデオロギー、そして17世紀のイングランドに起源をもちアメリカに持ち込まれた「主権的ピープル」というイデオロギー、すなわち、ピープルが独立した権力を有し、自らを統治することを訴えるイデオロギーが、テイグら黒人たちの思考に伝播し、心を捉えていたことは間違いない。1846年12月に行われたスピーチで、テイグはリベリアの独立を視野に入れて次のように述べている<sup>25)</sup>。

同胞市民よ、汝らを導く先人たちの経験があるということを祝いたまえ。政府に関する知識は、今や尊厳ある学問にまで高められている。[中略]。王が授かった神権はその力を失い、社会の成り立ちに関する度重なる観察はようやく人間に興味深い真実を教えるに至った。その真実とは、施政者 (magistrate) と国民 (subject) が同一であるということである。よって、政府はピープルのためにあるのであって、ピープルが政府のためにあるのではな

---

25) 'Anniversary Speech of Hilary Teage, a Coloured gentleman, (the son of a Virginian Slave), delivered at Monrovia, in Liberia,' in Wilson Armistead (1848) (ed.) *Calumny Refuted by Facts From Liberia*, New York: Anti-Slavery Office, 25-26.

い。これこそが、アメリカ独立宣言で初めて宣言され、打ち立てられた永遠の真実である。

封建時代のヨーロッパでは、王は神から統治権を授かる施政者で、政府は王のためにあった。ところがその時代は過ぎ去り、王に代わって国民が施政者になった。そして政府は王のためにではなく、ピープルのために存在することになった。まさにこれは、「主権的ピープル」というイデオロギーにもとづいた統治論であった。この「主権的ピープル」というイデオロギーは17世紀のイングランドで編み出され、ピューリタンたちによってアメリカに持ち込まれた。そしてアメリカ独立革命によって、その「主権的ピープル」というイデオロギーは複写可能なものとしてモデル化され、西半球に広まっていった。「アメリカ独立宣言で初めて宣言され、打ち立てられた永遠の真実」だとテイグが言っているのは、まさにこの「主権的ピープル」のイデオロギーのことであった。そしてテイグが「今や尊厳ある学問にまで高められている」と言っているように、「主権的ピープル」というイデオロギーに基づいた「政府に関する知識」は、知識人であればだれでも知っている「真実」であった。そしてそれは他でもない、「汝らを導く先人たち」、すなわち「アメリカ人」が教えてくれたことであった。

テイグは、その「真実」について次のようにも言う<sup>26)</sup>。

真実はパワフルなので、最終的に勝利するであろう。真実は、かつて邪悪で無知がはびこった場所に強力かつ不断の光をあてた。

その結果、人は尊厳と権利に注目するようになり、それを要求す

---

26) 'Anniversary Speech of Hilary Teage, a Coloured gentleman, (the son of a Virginian Slave), delivered at Monrovia, in Liberia,' in Wilson Armistead (1848) (ed.) *Calumny Refuted by Facts From Liberia*, New York: Anti-Slavery Office, 26.

る一方、他方でそれを保持する努力をするようになった。

テイグによれば、「真実」すなわち「主権的ピープル」というイデオロギーは、「かつて邪悪で無知がはびこった場所」でも、最終的に人々を啓蒙してしまうほどパワフルである。その結果として、人びとは「主権的ピープル」としての「尊厳と権利に注目する」ようになる。テイグからすれば、「主権的ピープル」というイデオロギーに基づく政府を「要求する一方、他方でそれを保持する努力をする」のは、啓蒙化された人間であれば当然のことである。言ってみれば、ピープルが独立した国家を要求し、それを保持しようとするのは、至極当然のことであった。

## 2. 「主権的ピープル」というモデルの伝播

このモデル化された「主権的ピープル」というイデオロギーは、どのようにしてテイグの意識の中に入り込んできたのであろうか。まず、学校教育組織や書物を通じてテイグの意識の中に入り込んできたと考えられる。先述したとおり、テイグは少年だったころ、白人バプティストたちが運営する黒人学校で熱心に勉強し、ヨーロッパ伝統の自由主義教育を受けた。また、西アフリカに移住した10代後半にイギリス式の教育を受け、「典型的な学者」のような話しぶりだったことも述べた。これらのことから、テイグが自由主義を奉じる、かなり高いレベルの知識人だったことは容易に想像できる。「主権的ピープル」というイデオロギーにつながる自由主義思想は、学校教育組織を通じて少年期から既にテイグの意識の中に入り込んでいた。

バローズによれば、テイグが好んで読んだのは、イギリスの共和主義者で詩人だったジョン・ミルトン、イギリスの政治家でアメリカ独立宣言を支持したエドモンド・バーク、そしてアメリカ独立宣言の起草者でもある

トマス・ジェファーソンらの著作であった (Burrowes 1999: 23)。これらの著名な共和主義者の著作を好んで読んだテイグは、自由主義的共和主義 (liberal republicanism) の思想からかなり影響を受けたはずである。共和主義は、「アメリカ独立宣言」で強調されたように、政治権力の世襲を拒否する一方、他方で「自由」と「不可分の権利」を強調し、ピープル全体を主権者とみなす思想である。その意味で、共和主義国家は「主権的ピープル」というイデオロギーが具現された政体であった。アメリカ革命やフランス革命によって示された共和主義政体は、その後19世紀の前半にかけてある種の「モデル」になり、西半球で多くの共和国が誕生した。そしてその背景には、西半球の政治家や専門家たちが全体として、「主権的ピープル」または「ネーション」という原理・原則の言説を編成し、その「主権的ピープル／ネーションから成る世界」の現実性を醸成していたというコンテクストがあった。テイグは、欧米の哲学者や政治家たちの著作を熱心に読むことにより、そのように「世界モデル」として醸成された自由主義的共和主義や「主権的ピープル／ネーション」のイデオロギーを自分のものとしていったと考えられる。

リベリアの黒人コミュニティ自体が、「主権的ピープル」というイデオロギーを黒人たちの間で伝播させる機能を果たしたとも考えられる。繰り返しになるが、1820年代初めにエリザベス号やノーチラス号に乗って西アフリカに移民した黒人たちは、ミラーがそういうように、「多くは、すべての領土的・政治的事柄に関し、主権を有するものと単純に期待していた」(Miller 1975: 60)。要するに、彼らの多くは自分たちを「主権的存在」とみなしていた。テイグは、リーダー格だった父コリンのもと、そのような意識が高い黒人たちの集団の中で暮らしたのである。テイグが著名な共和主義者の著作を好んで読んだのは、そのようなコミュニティの中で暮らしていたことと無関係ではなかろう。アメリカ植民協会との権力闘争

が続く中、このような黒人たちの集団と共に生きる状況は、テイグラ黒人たちの意識の中に「主権的ピープル／ネーション」というイデオロギーを根付かせる相互作用をもたらしたと思われる。

アメリカ植民協会からの影響もあったであろう。ドレイパーがいうように、アメリカ植民協会は、自由黒人に対し、アフリカに移住すればアメリカでは得ることが難しい自由と平等を手に入れることができると吹聴し、どうにかして彼らをアフリカに移住させようとした (Draper 1969: 9)。さらに、アメリカ植民協会は、黒人たちが自由と平等だけでなく、自治政府 (self-government) を得られることを示唆した。「1820年規約」(1820 Constitution) の第2条で、将来的に「エージェントを引き揚げさせ、植民者 (黒人) たちに彼ら自身の政府をもたせる」と記したのは、まさにそのことを意味した。テイグは、「リベリア独立宣言」でそのことに触れている。

アメリカ植民協会との最初の規約で、我々は、重要な理由によって、一定の政治権力を当該協会に委任した。それと同時に、この協会は、ピープル (黒人たち) が政府を運営する能力を得るか、もしくは自らの政府を望むときが来たらいつでも、その委任された権力を明け渡すと同時に、その管理から平和的に撤退し、ピープル (黒人たち) に彼ら自身の政府をもたせると明記した。

テイグラ黒人たちは、アメリカ植民協会が「最初の規約 (1820年規約)」で「ピープル (黒人たち) に彼ら自身の政府をもたせる」と記していたことをしっかり覚えていたのである。テイグラ黒人たちからすれば、「黒人たちが自らの政府をもつ権利」があるということを示唆したのは、アメリカ植民協会自身であった。「黒人たちが自らの政府をもつ」ということを



アメリカ植民協会が1820年の規約で示唆し、テイグたち黒人たちはそれを期待し続けた。すなわち、「独立した権力を有し、自らを統治するピープル」、すなわち「主権的ピープル」のモデルを、アメリカ植民協会が黒人たちに示したがゆえに、テイグら黒人たちはそれを実現可能な将来像として追い求めたのである。そのことが、「主権的ピープル」であるという彼らの思いを強くしていったことは間違いない。

アメリカ植民協会が、黒人たちに最初から「主権的ピープル」のモデルを示したのは、半ば必然的であった。なぜなら、アメリカ植民協会の指導的メンバー自身が、「主権的ピープル」というイデオロギーを言説的に構成する専門家や政治家たちの集団だったからである。アメリカ植民協会の構成員は、出身地域や宗教観によって「黒人問題」に関する立場が異なるにしても、基本的には「アメリカン・ネーション」の熱心な信望者であった。初代会長のブッシュロッド・ワシントンは初代大統領ジョージ・ワシントンの甥としても有名だったし、当時連邦議会下院議員で後に第七代大統領になるアンドリュー・ジャクソンは副会長であった。さらに、第三代大統領のトマス・ジェファソンも熱心かつ公的にアメリカ植民協会を支持していた (Alexander 1846: 91)。19世紀の前半、欧米の専門家や政治家たちが全体として、「主権的ピープル」または「ネーション」という原理・原則の言説を編成し、「主権的ピープル／ネーションから成る世界」の現実性を醸成していたということは先ほど主張したとおりである。アンダーソンも、事実上、遅くとも1810年代には、「国民国家のモデル」が「海賊版制作のために利用できるようになっていた」と述べていて (Anderson 1991:137)、いかに「主権的ピープル／ネーション」という原理・原則の言説が西半球で広まりを見せていたかを強調している。19世紀前半にアメリカ植民協会をリードしたメンバーは、アメリカ独立革命の第一世代か第二世代であり、まさにそうした言説編成の一翼を担うような専

門家や政治家たちによって占められていた。そうしたメンバーによって構成されていたアメリカ植民協会が、いずれ黒人たちによって統治されるであろうリベリアの政体を考えた際、「アメリカン・ネーション」または「主権的ピープル」のモデルに依拠するのは当然のことであった。だからこそ、「1820年規約」に将来的に「エージェントを引き揚げさせ、植民者（黒人）たちに彼ら自身の政府をもたせる」と記したのであろう。このような意識がアメリカ植民協会側に最初からあったので、1847年7月の独立宣言に至る前、アメリカ植民協会がグリーンリーフ教授をリベリアに派遣して憲法作成の手助けをしようとしたのは、自然な流れであった<sup>27)</sup>。ミルズという言葉を借りて言えば、アメリカ植民協会はリベリアの「ネーションの独立宣言、憲法、政府組織、国旗などに関して大きなインスピレーションを与えた」（Mills 2014: 93-94）。エミグレーションの初期から独立時まで、アメリカ植民協会が「アメリカン・ネーション」をリベリアの将来モデルとして提示し続けたことにより、テイグラ黒人たちが「主権的ピープル／ネーションから成る世界」という原理・原則をより強く意識したことは間違いない。

リベリア「独立宣言」の冒頭で、テイグはリベリアの独立を「世界の諸ネーション（nations of the world）に対してアナウンスする」と述べている。テイグの頭の中に「主権的ピープル／ネーションから成る世界」のイメージがあったことは間違いない。更に、「独立宣言」の最後は次のように締めくくっている。

人道主義、美徳、そして宗教的創造主である偉大なる神の名にお

---

27) ミルズによれば、憲法作成に関わった黒人たちは「白人たちの手助けは要らない」と虚勢を張ったという。しかし、公布された憲法案は結局グリーンリーフ教授が提示した素案をかなり参考にしてつくられたという（Mills 2014: 91）。

いて、キリスト教世界の諸ネーションに我々は訴える。我々の特殊な事情を鑑み、同情と友情の配慮をもって、文明的で独立した国家間に外交関係を築く資格を与えてくださるよう考慮していただくことを、誠実かつ尊敬の念を持ってお願いしたい。

要するに、独立国家として承認し、外交関係を築いてもらえるよう、「独立宣言」の最後をお願いしているのである。興味深いのは、「独立宣言」の冒頭で「世界の諸ネーション」(nations of the world) という表現だったものが、最後に「キリスト教世界の諸ネーション」(nations of Christendom) に変わっていることである。テイグにとって、文明的と見なされるのは西半球の世界であり、「文明世界」は「キリスト教世界」に他ならなかった。テイグ自身もバプティスト教会の牧師を務めていたし、エリザベス号やノーチラス号に乗ってリベリアに移住してきた黒人たちが総じて敬虔なキリスト教徒であったことを考えれば、それもうなずける。これまでリベリアの黒人たちが直接接触してきたアメリカ植民協会、アメリカ政府、そして貿易商の後ろ盾をするイギリスやフランスなどの諸外国政府組織も、すべて「キリスト教世界」に属していた。テイグら黒人たちが独立時に「主権的ピープル／ネーションから成る世界」の現実性を強く意識していたことは間違いないが、それによって示されたネーションのモデルは、「キリスト教の諸ネーションから成る世界」におけるそれだった。ゆえに、リベリアン・ネーションを建設しようとしたとき、テイグら黒人たちは「キリスト教の諸ネーション」イメージし、その一員となるべく「キリスト教世界」にメッセージを送ったのである。キリスト教のネーション（特にアングロ・アメリカ）をモデルにして、それを「文明的」と規定して建設されたりベリアは、それ自体が1つの「ブラック・ネーション」のモデルとなり、その後アレクサンダー・クラメルやヘンリー・ター

ナーらの黒人エミグレーションистたちを惹きつけることになる。そして、その「アングロ・アフリカ的」なブラック・ネーションをイメージしたがゆえに、「野蛮な」アフリカの先住民たちと深刻な対立関係をその後生じさせることになるのである。

## おわりに

本稿では、主にヒラリー・テイグを取り上げ、19世紀前半のブラック・ナショナリズムについて論じてきた。当然、リベリアの独立を果たしたアメリカ黒人たちは、皆ブラック・ナショナリストであったと言えるが、間違いなくテイグはその中心人物であった。アメリカにおけるブラック・ナショナリズムは、言説レベルではアメリカ独立革命と共に始まり、リチャード・アレンやデヴィッド・ウォーカーらの先駆的活動で見られるように、18世紀から19世紀にかけて一定の高まりを見せた（原 2022; 2023）。そしてテイグの時代に、それを成熟させ、「成功」させた。ここで言う成功とはアメリカ黒人による「ブラック・ネーションの独立」である。言説レベルでは、「ブラック・ネーションの独立」の語りは21世紀まで続いているが、実際に独立を果たしたのはリベリアのケースだけである。

非常に興味深いのは、それだけ突出した成功例であるにも関わらず、テイグらの運動に焦点を当てた研究が驚くほど少ないことである。テイグらのブラック・ネーションがアメリカ本土ではなく、アフリカで建設されたということも、その理由のひとつであろう。いずれにせよ、テイグらの運動はアメリカにおけるブラック・ナショナリズムを研究する上で、非常に重要であることは間違いない。その意味で、リベリアを建国したアメリカ黒人たちを取り上げた研究が深まることを期待したい。

## 参考文献

### 日本語文献

- 原百年 (2016) 「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源」山梨学院大学『法学論集』77号。
- 原百年 (2018) 「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源 (2) —理論枠組みと仮設—」山梨学院大学『法学論集』81号。
- 原百年 (2021) 「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源 (3) —ピルグリム・ファーザーズから独立革命まで—」山梨学院大学『法学論集』87号。
- 原百年 (2022) 「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源 (4) —ブラック・ナショナリズムの先駆者：リチャード・アレン—」山梨学院大学『法学論集』88・89合併号。
- 原百年 (2023) 「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源 (5) —ブラック・ナショナリズムの先駆者：デヴィッド・ウォーカー—」山梨学院大学『法学論集』91号。
- クォールズ・ベンジャミン (1994) 明石紀雄他訳『アメリカ黒人の歴史』明石出版 = Quarles, Benjamin. (1987 [1964]) *The Negro in the Making of America*, 3<sup>rd</sup> edition, New York: Macmillan Publishing Company.
- フランクリン・ジョン・ホープ (1978) 井出義光他訳『アメリカ黒人の歴史—奴隷から自由へ』研究社出版 = Franklin, John H. (1974) *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans*, New York: Alfred A. Knopf, Inc.

### 英語文献

- Alexander, Archibald. (1846) *History of Colonization on the Western Coast of Africa*, downloaded from Internet.
- Anderson, B. (1991 [1983]) *Imagined Community*, rev. edn, London: Verso. (白石隆・白石さや訳『増補 想像の共同体』NTT出版、1997年)
- Armistead, Wilson. (1848) *Calumny Refuted, Facts from Liberia; Extracts from the Inaugural Address of the Coloured President Roberts; An Eloquent Speech of Hilary Teage, A Coloured Senator*, New York: William Harned Anti-Slavery Office.
- Burrowes, C. Patrick (1999) 'In Common with Colored Men, I Have Certain Sentiments: Black Nationalism and Hilary Teage of the Liberia Herald', *American Journalism*, Summer, 17-35.
- Burrowes, C. Patrick. (2001) 'Black Christian Republicanism: A Southern Ideology in Early Liberia, 1822 to 1847', *Journal of Negro History*, 86, 30-44

- Burrowes, C. Patrick. (2004) *Power & Press Freedom in Liberia, 1830-1970*, Trenton: Africa World Press.
- Draper, Theodore. (1969) *The Rediscovery of Black Nationalism*, New York: Viking Press.
- Franklin, John H. (1974) *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans*, New York: Alfred A. Knopf, Inc. = (1978) 井出義光他訳『アメリカ黒人の歴史—奴隷から自由へ』研究社出版.
- Greenfeld, L. (1992) *Nationalism: Five Roads to Modernity*, Massachusetts: Harvard University Press.
- Jaynes, Gerald D. (ed.) (2005) *Encyclopedia of African American Society*, London: Sage Publications.
- July, Robert. (1968) *The Origins of Modern African Thought*, London: Faber and Faber.
- McGraw, M. Tyler (2007) *An African Republic: Black & White Virginians in the making of Liberia*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Miller, Floyd (1975) *The Search for a Black Nationality: Black Colonization and Emigration 1787-1863*, Urbana: University of Illinois Press.
- Mills, Brandon. (2014) 'The United States of Africa: Liberian Independence and the Contested Meaning of a Black Republic', *Journal of the Early Republic*, 34, 79-107.
- Hinks, Peter P. (2000) 'Introduction' in Peter Hinks (ed.) *David Walker's Appeal to The Colored Citizens of the World, Pennsylvania*: Pennsylvania State University Press.
- Nash, Gary (1988) *Forging Freedom: The Formation of Philadelphia's Black Community, 1720-1840*, Harvard University Press.
- Quarles, Benjamin. (1987 [1964]) *The Negro in the Making of America, 3rd edition*, New York: Macmillan Publishing Company = (1994) 明石紀雄他訳『アメリカ黒人の歴史』明石出版。
- Taylor, James B. (1837) *Biography of Elder Lott Cary, Late Missionary to Africa. With an Appendix on the Subject of Colonization*, Electronic Edition
- Teage, Hilary. (1841) 'Letter from Mr. Teage', *African Repository*, Vol. 17, Washington: Alexander and Barnard.
- Teage, Hilary. (1843) 'The Land of Mighty Dead', *African Repository*, Vol. 19, Washington: Alexander and Barnard.
- Teage, Hilary. (1846) 'Anniversary Speech of Hilary Teage, a Coloured gentleman (the son of a Virginian Slave), delivered at Monrovia, in Liberia, December 1st,

1846', in Armistead, Wilson. (1848) *Calumny Refuted, Facts from Liberia; Extracts from the Inaugural Address of the Coloured President Roberts; An Eloquent Speech of Hilary Teage, A Coloured Senator*, New York: William Harned Anti-Slavery Office.

Teage, Hilary. (1847) 'Independence of Liberia', *African Repository*, Vol. 23, Washington: Alexander and Barnard.

Teage, Hilary. (1853) 'Extracts from a letter from the HO. H. Heage to the Rev. J. B. Pinney', *African Repository*, Vol. 29, Washington: Alexander and Barnard.

Temperley, Howard (ed.) (2000) *After Slavery: Emancipation and its Discontents*, London: Frank Cass.

White, Deborah G. (1996) *Let My People Go: African Americans 1804-1860*, New York: Oxford University Press.